

キエフ・ペチェルスキー 修道院聖者列伝における 物語の比較研究(Ⅱ)

ポリカルプによるふたつの物語

(Сл.28グリゴリー、Сл.30モイセイ)をめぐる考察

三浦清美

序にかえて

キエフ・ペチェルスキー修道院聖者列伝(以下、КППと略す)にくだされた評価は、“Прелесть простоты и вымысла”の宝庫としてインスピレーションを求めたプーシキン(#1)から、心理描出の妙のほかは見るべきもののない退屈な作品と断定するリハチョフ(#2)に至るまで種々様々であるけれども、それらはこの作品群のもつ простота をめぐる評家の姿勢を濃厚に反映する点で一致する。チジェフスキー(#3)、フェドートフ(#4)、さらに、現代の研究者諸家が声を揃えて指摘する“思想的な深み”をそこに見出すまでに、退屈さという大きな壁を幾重も越えなければならないこともまた確かである。では、こうした“素朴さ”“単調さ”“面白くなさ”がそのまま作品群自体の価値の低さに繋がるものかどうか。無論、答えは否である。しかしながら、否と言う根拠をそう容易くあげつらうことができないのは、わたくしたちが全く異なる価値の体系に心を開くことがそこで強く要求されているからだと思われる。

КППに収められた物語のなかでも、心理描出に発揮されたポリカルプの驚くべき手腕、人格の襞を的確にとらえたネストルのバランスのとれた筆致と共に、あるいは、それ以上に、わたくしを愕然とさせたのはシモンによる物語の圧倒的な単調さであった。シモンによる物語のこの単調さは何なのか、それは一体何処に由来するのか、この問いを絶えず遠くに見据えながら加えた考察が先に東京大学へ提出した修士論文である。本稿が対象とするのは、ポリカルプによるふたつの物語であるが、ここで行なわれる論考はすべて、シモ

ンによる物語の構造と文体に対する先の分析の結果にほぼ全面的に依拠している。従って、ここで、その分析の手法と結論について、若干の説明を加えておく必要がある。

シモンによる物語の分析

物語の分析の方針、あるいは、読みのオリエンテーションに手法という言葉をあてがったが、これは、物語に関する理論として一般化を目指すものという意味ではない。この物語群に通底する最小限の要素は何かという問いかけを絶えず念頭に置いて進めた、シモンによる物語の読みの過程において、個と一般の間、即ち、具体的なテクストとその抽象化との間を、ひっきりなしに行き来するうち徐々にかたちを整えてきたものに過ぎない。

構造の分析

物語群は、その構造的な特徴によって「長い物語 (Biographic tale)」、「短い物語 (Novella)」の、二つのタイプに区分けすることができる。各々のタイプの特徴を以下に簡潔に整理したい。

☆ Biographic tale ある聖者の人格へと収斂してゆく個々のエピソードが、緩やかな結びつきをもって連結される。一人に聖者につき、人生の様々な時期に起こったエピソードが集成されるため、形態が聖者伝に接近する。出来事の経緯発展よりも、登場人物の性格付けに叙述の中心がある。

☆ Novella ある中心的事件を物語の核に持つ。登場人物の性格付けよりも、むしろ、物語のプロットに叙述の中心がある。物語は、核に当たる中心的事件を扱う後半部、それを用意する最低限の部分である前半部、さらに、以上物語の核部分に対して背景を与える導入部からなる。

Biographic taleとNovellaの間には一定の相関関係がある。即ち、Biographic taleはNovellaを構成要素として持つことが可能であり、Novellaはその核となる部分に付加的なエピソードを追加してBiographic taleに傾斜することがある。

この分類に加えて設けた下位分類のうち、Biographic taleに関するもののみを以下に挙げる。

☆第1タイプ пагы же, инъ братъ, иногда же пагы等、主題的類似を示す言葉によって、エピソードが結ばれることがあり、各々のエピソードは時間的に独立している。Сл.28はこのタイプに属する。

☆第2タイプ по сихъ же, разумевь же等、時間的前後関係を示す言葉によってエピソードが結ばれることがあり、諸エピソードは物語を流れるひとつの時間の上に配列される。Сл.30はこのタイプに属する。

文体の分析

物語において、時間の展開が如何にしてもたらされるか、空間の広がり如何にしてもたらされるかを中心に行なった。

まず、物語における時間の展開を考えるにあたり、物語の扱う出来事に対する作者の内的な姿勢に二つの可能性を設定することから出発する。一つは、作者がいわば出来事の起こった時点で身を置き、ほとんどの場合、登場人物の行動に密着して、これを書き留めていくものである。こうして叙述された登場人物の行動、言動、出来事、さらに、時間の経過に対する直接的言及によって構成される時間の流れを時間の軸と呼び、こうした時間の流れを底流にもつ物語の叙述を時間の軸による叙述とする。いま一つの作者の姿勢のありかたは、執筆の時点から物語の扱う出来事を過去のものとし、見渡し、こうして得られた鳥瞰的展望をもとに叙述を行なうものであり、これを回顧的視座による叙述とする。これに属するものはおもに 1.因果関係による叙述の展開 2.巨視的把握+微視的把握 3.物語の扱う出来事と物語の享受者である僧侶たちとをより密接に結び付けることを意図した叙述である。1・2の場合は、時間の軸による叙述の場合と同様に、叙述の軸を形成することがあり、3の場合は、多くは物語を締める枠の働きをする。

前者は作者が時間を積極的に押し進めて行くという印象を与えるのに対し、後者は、時間の経過を扱う場合でも、時間をゆっくり手繰り寄せていくかのような印象を与える。

テクストにおいて、以上に挙げた種々の叙述パターンを同定していく過程で次のようなことがわかった。物語の核部分が扱うのは、ほとんどの場合、時間を軸とした叙述であり、回顧的視座によるそれは、導入部、若しくは、核部分

前半で、物語の中心的事件を準備するに過ぎない。その際、登場人物の置かれた状態、多くの場合、心理的状态を提出する役割を担い、教導的意図をもつ言及を導き入れる空隙を作る。

場所に関しては遺憾ながら、列伝に収められた物語は空間的広がりの中で、頗る貧しいと言わざるを得ない。読み手に空間を意識させるものでもっとも頻繁に現われるのは、登場人物の場所の移動であるが、登場人物の行動は物語の時間の形成と密接に結びつくものであるため、より強く感受されるのは、空間的な広がりではなく、むしろ時間の経過の方である。

こうした時間の把握の、空間の把握に対する優越は、アウエルバッハが『ミメーシス』冒頭において創世記をその例にとって明らかにしたように(#5)、享受者の信仰を前提にして書かれた宗教文学の特徴と考えることができる。

叙述の軸について

本稿においてしばしば用いる叙述の軸という言葉に関して若干の説明を加えたい。軸とは叙述の求心性のことである。ひとまず、こう定義したうえで、実例に当たりながら、この言葉について考察していくことにする。シモンによる物語を検討した結果、前述のように、軸には以下の三つのタイプがあることがわかった。

- A.因果関係による叙述の軸
- B.[概括的把握+詳細の情報]による叙述の軸
- B.時間の軸

A,Bの場合共に潜在的に時間的前後関係を含む場合がある。その具体例を以下に記す。

☆Aの場合：作者の関心は、[教会のために財産を使い果たす一極度の貧困に陥る一絶望する一生活が荒れる一病に罹る]と言う心理的、応報的因果関係に集約されたおり、これに伴う時間の経過はこの因果関係に付随するものに過ぎない。

въсхотъ→ послаという時間的前後関係よりむしろ、出来事の大枠を示し、然るのち、詳述に移るといふ叙述の流れを読みとることがふさわしい。さらに、連結2も、事件の発端からワシーレイの性格付けへの、概括から詳細への叙述の流れに従っている。つまり、この部分の叙述の流れを性格付けているのは時間的前後関係ではなく、[概括的把握+詳細の情報]による叙述の流れであるといえる。

☆Bの場合：叙述の前後関係と叙述される対象の時間的前後関係が一致する。時間の軸の骨格となるのは動詞及び動詞の派生形であり、これらとシンタクスの不可分な要素が時間の軸を構成する。

前述したように、時間の軸による語りは、主に、登場人物の行動、言動、出来事にたいする言及、及び、時間の経過にたいする直接的言及から成り、本来極めて客観性の強いものであるが、時として、次に挙げるように、語り手の主観が客観的叙述と糺混ぜになり、一つの時間の流れを形成する場合がある。その際、語り手は物語の作者そのひと（この場合は宗教的な指導者という立場にあるウラジーミル・スーズダリ主教シモン）に著しく接近する。

Сл.23核部分前半

Нькогда же сему Титови разболъвшуся
вельми и уже в нечаании лежашу, нача
плакаться своего лишения, и посла съ
умилениемъ къ диакону, глаголя: «Прости
мя, брате, бога ради, яко гнѣвахъ на тя»
Сей же жестокими словесы проклинаше е-
го. Старци же тии, видѣвше Тита умитающа,
влечааху Евагрия нуждею, да простить-
ся съ братомъ.

あるとき、ここのチットがひどい病に
て泣き、め、謙慮な気持ちから補
る許にひとを、遺言で言っ。…
祭の許にひとを、遺言で言っ。…
ググレイは酷い言葉でこのひとを呪
た。老僧たちは、兄弟とすうにエ
のを見て、兄弟とすうにエ
グレイを無理矢理引張ってき

この箇所は、僧侶としての価値観を基づく性格付け 及び 含み、主観性の濃厚な語り口になっているが、これらの要素は各々 посла, проклинаше という登場人物の行為に対する言及と不可分に結びつき、時間の軸を内部的に構成する因子と考えられるため、時間の軸による叙述とする。

このような時間の軸による語りはキエフ・ペチェルスキー修道院聖者列伝において支配的な叙述の形態であるが、その典型的な例はСл.5である。次に、このСл.5によって、時間の軸による語りについて、さらに検討を加えたい。

Sl.5 導入部

По мнозъхъ же лътехъ Иоанъ, разболъвся, остави Захарию 5 лът суша. Призва игумена Никона и раздаа имъние свое нишимъ, и часть сыновию дасть Сергию: 1000 гривень сребра и 100 гривень злата. Прѣдасть же и сына своего Захарию, юна суша, на соблюдение другу своему, яко брату върну, заповѣдавъ тому, яко: «Егда възмухваеть сынъ мой, дай же ему злато и сребро»)

、ひ財取グ幼うに渡
し、のの0、よ者を
伏こら子0たすの銀
に。か息1ま託こと
病たず、金。に、金
はしみえとた弟け、
ン残、与ナけ兄預はた
アをびけヴ預なににし
オイ呼分りに実許曉言
イゲをにグイ忠のた遣
、ルンタ0ゲを友しと
後セコ人0ル子親人」
のる二い0セ息の成。
もな長し1をのらがれ
年に院貧銀ナら自子く
何歳はを分ヴ自、息て
五と産りりに「し

核部分前半

Бывъшю же Захарии 15 лът, въсхоте злато и сребро оца своего у Сергия. Сий же, уязвень бывъ отъ диавола мнѣвъ приобрьсти богатство и хотъ животь съ душею губити, глаголаше юноши: «Отець твой все имение богови издалъ, у того проси злата и сребра, тыи ти должень естъ, аще ты поминуть. Аз же не повижень есмь ни твоему отцу, ни тебь ни во единомъ златницѣ. Се ты сътвори отецъ твой своимъ безумиень, раздаавъ все свое въ милостыню, тебе же нища и убога оставилъ.»

ルとた考い神銀負債に枚父な捨
せういうてて金をを前一のう喜だ
、ろによしべに債前お、前よをの
時取廢しとす神負お、もおの産た
たけ悪にうをののがはて。こ財し
っ受、のそ産そ前神私しい、の残
なをほもほ財、お、の対なら分て
に銀者が減、らがもこにはか自し
歳との我をはか神し。父務さ。に
5金を命父だ。もがの義なだし
1、富にののい。だ前うりの無
はらし、共前たよだ、お私足た文
ヤかかれとおしがるば、支のつを
リ許しわ魂「出るるらも慮や前
ハの。な。しめいならも貨思をお
ザイした損てた差求てむし金はとて
ゲしくえったにをっれ対の親こし

Сиа же слышавъ, юноша нача плакаться своего лишения. Посылает же юноша с любовью къ Сергею, глаголюи: «Дай же ми половину, а тебь половина.» Сергей же жестокими слоесы укоряше отца его и того самого. Захарие же третнее части проси, таче десятые. Видѣвъ же себь лишена всего, глаголетъ Сергию: «Прииди и клеми ми ся въ церкви Печерской прѣд чудною иконою богородичною, иды же и братство възъ ся съ отцемъ моимъ»

のイにな言ヤ十元イスてい
もゲ私あいに手ゲルて誓
た「は酷ハいのルエ立に
れセ。分はザつ分セチを父
わはた半イ。が自、べいの
失者つのゲたれがと。誓私
は若言後ルつそてるいでで
者。て。セ罵、べかし前こ
若た「い」をたすわ欲のそ
、め遣し。とめ。がてンはら
て始を欲い親求たと来コたか
いきとてよ父をっこ「イなだ
聞泣ひしよと一ない。のあの
をてに渡れれのととなた会。た
れつとをとか分の一らう教いて
この半分が三分の残言イした
をの半た葉は分ににキ欲を

核部分後半

Сей же иде въ церкви и ста пред иконою богородичною, отвѣща кленяся, яко не възяхъ 1000 гривень сребра, ни 100 гривень злата, и хотъ цюловати икону, и не възможе приблизитися къ иконѣ. И исходяшу ему изъ дверей, нача въпити: «О святаа Антоние и Феодосие, не велита мене погубити аггелу сему немилостивому, молита же ся святый богородици, да отженеть от мене мнозъа бьсы, имъ ж есмь преданъ. Възъмьте же злато и сребро запечатленно въ кльти моея» И оттоль не не дадяху клятися святою Богородицею никому же.

奇りけしるンなう。す手家よのち
、グ受助けをア貴給えまのがこる
と0金を近扉な、命り給ど、取來た
る00のンを、聖よお祈め者はけ以を
い00のンを、聖よお祈め者はけ以を
は1ナコ願は、イうにしのら受。い
に、ウイに彼おシよ母らそたをた誓
かきり、ン。お一すの去は前銀って
な跪グいコた「ド殺みを私お金襲け
のに0誓イっ。オを生魔も。お金襲け
会前0と、かたエ私の悪のられ怖に
教の1いながなめフに神のうかさ畏ン。
はンとなたき始、ちるくいだ印をコい
者コ銀いしできイたな多との封皆イな
このイのてとが泣二使聖ら。ある。母は
跡ヴ取よことトときな私よにより聖の

物語は、世俗の不祥事を奇跡のアイコンが解決すると
いう神秘的な出来事を扱った後半部、それを用意する最小限
の部分からなる前半部、さらに、この核部分の背景をつくる
導入部からなる。引用箇所の前に、“太陽より眩い奇跡のイ
コン”にかけてイオアンとセルゲイが兄弟の契りを結ぶ

りが、後に、セルゲイの隠していた宝が倍になるという奇跡を担う部分があるが、割愛した。(いずれも、アオリスト動詞の連鎖により叙述が展開されている。)

物語全体が、остави, призва, раздаа, въсхоте, нача, иде, ста等、アオリスト動詞を中心に展開され、完結した登場人物の行為、出来事が積み重ねられることにより、事物の変貌が追跡されている。作者が事物の変貌に一貫した注意を払って物語を展開していることは、核部分の背景を与える導入部でさえ、アオリスト動詞で与えられていることとあらわれている。ことに、引用した導入箇所が、実体的な時間の前後関係を持たないにもかかわらず、アオリスト動詞の積み重ねで与えられていることは注目に値する。この部分は、最終的にイオアンの遺言を担うダイレクト・スピーチが導かれることから、遺言の具体的な内容をその実施による帰結としてひとつひとつのアオリスト動詞に置き換え、このようにして時間の流れを装わせた上で、文脈の前後を流れる時間のなかに組み入れたものと考えることができる。同様に、前半部(a)において、セルゲイの変身に対する作者の解釈が、主体を悪魔にとった完結した行為というかたちで与えられていることは注目すべきである。叙述の対象 уязвень бывъ → мнѣв → хоть~ погубити → глаголаше は実体的な時間の前後関係を持つものというよりも、作者が、僧侶としての人間観に基づいた因果関係を念頭にいれながら、事物の変貌する様を追跡したものと考えるほうが相応しい。しかしながら、一方で、この文脈の前後にある時間の流れを途絶えさせないよう、時間の流れを装わされていることも事実である。というよりも、作者にあってはこの因果関係がほんのわたらずかな疑いさえ挿む余地のないほどに確固たるものであったから、抽象性の高い(回顧的な視座から時間をゆっくり手元に手繰り寄せ)因果関係による叙述の系列ではなく、より具象性の高い(物語の現在に立って時間を積極的に押し進める)時間の軸による叙述の系列に依拠して、物語りを簡潔かつ力強く展開させたと考えることができる。

時間の軸は、叙述の対象がもつ時間的前後関係と濃厚な関わり合いを持つが、必ずしも、それに支配されるときは限らない。Сл.5のように、実体的な時間の前後関係を持たないにもかかわらず、叙述の求心性を時間に求めるべき時もある。この場合、叙述が担っていたのはイオアンの遺言の具体的な内容であったが、これらがその実施による帰結として、一つ一つの動詞に置き換えられて提示されていた。従って、

ポリカルプによる物語の分析

Сл.28 奇跡の聖者グリゴリー にまつわる話

構造

導入部	エピソード 1	エピソード 2	エピソード 3	エピソード 4	付加的な部分
グリゴリーの人の紹介	盗賊の到来 催眠・改心 盗賊の救出	盗賊の到来 神縛り 盗賊を許す	盗賊の到来 盗言成就(盗賊の死)改心	ロスチスラフ公によるグリゴリー殺害	“力ないものを守れ”という教訓の提示
因果関係の複雑な連鎖を連る叙述	基本的に時間軸によるNovella構造	基本的に時間軸によるNovella構造	基本的に時間軸によるNovella構造	基本的に時間軸によるNovella構造	нравописательный стиль おもに聖書からの引用

Сл.28は、以上の通り、導入部と4つのエピソード、および、教導のみを担う付加的な部分からなる。エピソードは4つとも、時間の軸による語りであり、いずれも、Novella的構造をとっている。エピソード間の連結関係は、エピソード4が一連のエピソード群の最後を占めるということが明らかに分かるだけで、時間的前後関係に特別の配慮をもって配列されているのではない。むしろ、その配列は、テーマの軽重、プロットの複雑さの度合いにより配列されたように思われる。従って、先の分類に従うのならば、Сл.28は第2のタイプに属すると結論することができる。

導入部

Сей же блаженный Григорий прииде к святому отцу нашему феодосию в Печерскому монастырь и от него научень бысть житию чернескому: нестяжанию, смирению, послушанию и прочим добродетелем.
Молитвам же паче прилежаше,
и сего ради приать на весы побьду,

この至福のグリゴリーは、ベチェルスキ修道院のわれらが教父フェオドーシイのもとを訪れてこのひとから、僧の生活、即ち、無欲、謙抑、従順のほかの徳行について学んだ。
祈りにますます精を出し
この故に悪魔に対して勝利を得た。

прииде
научен
бысть

прилежаше
приать

長い時間を持つ時間の把握

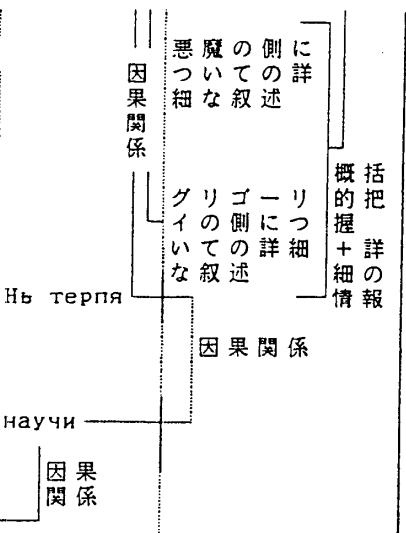
因果関係

註

еже далече сущим им въ-惡魔たちはん遠くかのらこの
 пити: (О Григорий, изон-ひとおまに叫んだりもの一のあり、
 иши ны молитвою своею「お祈りだ。」はんぐわって追たい出し
 !)

Имъаше бо блаженный об-といののは、このひとはり
 ычай по всяком пьнии-祈りの度毎に調伏ので祈る
 запыршалныя творити мо-を唱えていたかからである。
 литвы。
 Не терпя старый врагъ-悪魔の長は彼に追い払わ
 прогонения от него, неれこの人のとに耐えしれず、の
 могый чимъ иньмъ житию-れこの人でこのに耐えしれず、の
 его спону сътворити, 。この人でこのに耐えしれず、の
 научи злыя челоувы, пок-悪れこの人でこのに耐えしれず、の
 радут его。この人でこのに耐えしれず、の

Нъ бь бо инога ничто-悪れこの人でこのに耐えしれず、の
 же имъа развь книгъ。この人でこのに耐えしれず、の



導入部は、この物語の主人公である聖者グリゴリーイの紹介に充てられている。

まず、グリゴリーイが祈りに精勤し、“無欲”、“謙抑”、“従順”などの様々な徳行により、聖者としての特殊な能力に対して開眼したことが、フェオドーシイへの師事にまで遡って、時間の流れを装わされて叙述されている。Молитвом же паче прилежашеは、прииде, научень бысть, приатьによって構成される時間の軸の間にはさみこまれているが、これは聖者の習慣的行為であり、聖者の生涯にわたって繰り返されたものであって、ある短い期間にのみ限定される行為ではない。прииде, научень бысть, приать等、点的に把握された行為の間に、長いタームによる時間把握に基づく習慣的行為が嵌めこまれていて、ふたつを結び付けているのは因果関係なのである。

祈りへの精勤によって、グリゴリーイは悪魔にたいして聖なる力を獲得して聖者となったわけだが、聖者の側、悪魔の側、ふたつの別な側面から、この時の有様を描き出している。こうして、具体的に描き出されたグリゴリーイの悪魔にたいする優位は、さらに因果関係を孕みながら、グリゴリーイに対する悪魔の復讐へと発展し、やがて、盗賊たちに来襲という共通のテーマを持つ種々のエピソードを導くことになる。

以上のように、グリゴリーイの悪魔にたいする優位を具体的に描き出した箇所が、【括弧的把握+詳細の情報】でほかの部分に連結しているのを除き、この部分の叙述の流れは因果関係によって構成されている。さらに、コメントリを参照して分かるとおり、様々な因果関係が潜在的顕在的に叙述に混在しており、因果関係による叙述の流れをより強固なものにしている。即ち、導入部の叙述の流れを決定づけているのは、因果関係なのである。

さらに今一つ叙述を決定付けている特長がある。
悪魔が悪人達に使嗾してグリゴリイを襲わせた動機が、не терпя, не могый ~ сътворити, 二つの異なる視点から与えられているが、こうした、ある同じ事柄につき複数動機を提出するというような叙述の多様化は、叙述の簡潔を旨とするシモンによる物語にはみられない特長であった。また、この箇所終わりの方では、因果関係による叙述の流れとは無関係に、「書物のほかはなにももっていない」という聖者の、財産不所持の徳が強調されており、我々にはむしろうさいという印象を与える。この両者はいずれも、シモンの物語の“簡潔”“静謐”といった印象とは異なる、“饒舌”“雄弁”な印象を醸し出しているのである。
さて、導入部独自の、長いタイムによる時間把握の細かい混ぜになった、因果関係の複雑な連鎖による語りを整理し、物語全体に共通する一種の饒舌体をこの導入部にも見いだしうることを指摘したところで、次のエピソード1を見てゆきたい。

エピソード1

エピソード1は、忍び入った盗賊をグリゴリイが祈りによって金縛りにする前半部、官憲の手に陥った盗賊をグリゴリイが自らの書物を売り払って救い出す後半部からなる。

ここで、今一度Novellaの定義に戻りたい。Novellaの定義として先に挙げたのは、①ある中心な出来事を物語の核に持ち、叙述の中心が物語のプロットにあること ②中心な出来事を担う部分＝後半部と、それを用意する最低限の部分＝前半部からなる核部分と、それに背景を与える導入部からなること 以上二つの点であった。

ところが、この定義をエピソード1に対して厳密に適用することは不可能である。エピソード1は、明らかに、聖者の祈禱により盗賊が金縛りになるという出来事、聖者が捕えられた盗賊を救い出す出来事、以上二つの出来事に物語の核が分裂しているが、後半部は、前半部で聖者が襲われたにもかかわらず、盗賊達の悔い改めに感じ入って彼らの窮状を救ったというグリゴリイの心の広さ、徳の高さを享受者に提示するという役割を果たしており、後半部にとって前半部は不可欠な前提となっているため、これを分離して各々別

のエピソードを構成するものとすることはできない。
むしろ、楯田の中心のように、このエピソードが二つの核を持つと考えるほうが相応しい。

では、各々の核について、②の条件を満たすことができないかどうか、検討してみよう。これを、Cl.5と比較すれば一目瞭然である。Cl.5は @修道院聖遺物による奇跡という明らかな物語の中心があること @D.S.を中心に展開してきた叙述が時間を軸にした地の語りになること @物語の舞台が修道院外から修道院内に移行することにより、前半部と後半部を極めてはっきりと区分けすることができた。ところが、ここでは、以下のコメントに記すとおり、前半部・後半部ともに、時間の軸からの逸脱要素を多く含むために、焦点に当たる出来事(前半部=金縛りの奇跡 後半部=盗賊の開放)にたいする叙述の集中度がすこぶる薄れ、当該箇所初めから終わりまで叙述がほぼ一様に流れている。即ち、ここで、②の条件を満たすように叙述を区分けすることはすでにテキストを無視した分析に陥らざるを得ないのである。先に指摘した前半部と後半部の有機的な連結は、盗賊を呪縛するという聖者の超自然的な能力と悔い改めたものをいたわるという長者の性格と、換言すれば、天上的な徳と地上的な徳を互いに増幅させながら結び付けるといふ役割を果たしており、むしろ、この連結こそ②の条件を満たすものとして相応しいのである。従って、この箇所は二つの物語の核を持った Novellaであると結論付けることができる。

以上が、エピソード1の構造分析に関する根拠である。

次に、テキストを具体的に見ていきたい

前半部

		時間の軸	時間の軸からの逸脱要素	註
Въ едину же ношь приидоша татие и стрежаху старца, да егда изыдетъ на утреню, и шедше възметь вся его.	ある夜、盗賊がこのひともとにやってくる、朝の祈禱に行つたらその持ち物をすべて盗みだしてやろうと長老を見張っていた。	придоша стрежаху	да егда изыдетъ ~ [概括的把握 + 詳細の情報] 盗賊たちの意志	
Ошутивъ же Григорие приход ихъ, — всегда бо попяше и моляшеся беспрестани посрьдь келии своая.	グリゴリーは彼ら来訪の氣づいた。一といは夜も、いつこのひとは常らう眠らず、僧坊で常らう祈っていた。	ошутив	всегда бо по вся ноши [- 因果関係] 長いタームをもつ時間(聖者の習慣)を指向	
Помоли же ся и о сих, пришедше красти: « Боже, дай же сонь рабомъ твоимъ, яко утрудисаша въсуре, врагу угажающе. »	この者たちについて自ら祈った。「神よ、あなたをの僕たちに眠りをおたすはく駄な骨折りを者たは悪魔をよするの	Помоли	« Боже, дай же сонь ~ угажающе » [概括的把握 + 詳細の情報] помолиの具体的内容	

上述のコメンタリイによって明かな通り、時間の軸からの逸脱要素が著しく多い。それらは、盗賊が長老を見張っている動機、長老の習慣、祈禱の内容、登場人物の行動をより印象的に浮き立たせるD.S.であり、ほとんどすべてがデテールの提出を意図したものである。これを、Cl.5と比べてみたい。Cl.5は、先に指摘したように、アオリスト動詞を次々に畳みかけることによってなり、このようにして形成される淀みのない時間の流れのなかに、厳然として立ち現われる神の意志にこそ物語の中心を求めざるを得なかった。これに対して、この物語の場合、作者の関心はこうした厳然とし、た時間の流れを作り出すことにはなく、導入部において指摘した通り、叙述の重複により登場人物の行動の多様に享受者の関心を促したり、この箇所でのように、物語の進展をあげる程度犠牲にして、状況を彷彿とさせるような細部の提出に心を遣うたりしている。作者が、簡潔極まりない事実の報告から生を決定する大きな意味を読み取らせようという、法外な要求を享受者につきつけるCl.5の場合と異なり、ここでは、作者が享受者の側の審美的要求にある程度応えるべく、意を用いているのである。

このことは、全体的に教導的な意図が後退していることにも現われている。物語の中心は、前半の場合、聖者の超自然的な能力であり、修道士達の生活に資するものとして、聖者が祈りに精勤していたと言及の他はなにもありそうではない。後半部は、教訓を読み取る余地を広く持っていめるが、例えば、盗賊達の窮状を救った心の広さをそこに読めばよいのか、あるいは、後半部の末尾に導かれた教導的文言のとうり、財産不所持の戒めを読めばよいのか、焦点が定まらず、作者の教導的な意図自体がどこにあるのか、はっきりしない。むしろ、作者によって提示される教導的な文言が物語の内容としっくりしないため、なにかとつけてつけたような印象さえ与えるほどである。これを、Cl.23,24,25等のシモンによる物語と比べてみるがよい。そこでは、物語一つ一つが常に明らかに一つの教訓を背負っているものであり、それゆえに、それらは恐ろしく退屈な物語であった。しかしながら、作者の意図がどこにあるのかは明白である。作者シモンは、極めて単純な事柄をなんの飾りもないにぶっきらぼうに投げ出しているのである。そこから、深い意味を読み取ることがまるで当然の義務であるかのように。ところが、この物語は、異なる。作者は物語の情景を彷彿とさせることに心を奪われて、説教を垂れることを時に忘れる有様なのである。

同様なことは、エピソード 2 以降についても、指摘することが可能である。

エピソード 2

このエピソード 2 は、先に挙げた Novella の定義にかなりの程度符合する構造をとっている。まず、前半部では、グリゴリーの所に忍び入った盗賊が呪縛を受けて僧侶達に取り押さえられるまでを扱い、後半部では、盗賊達の懇願を受けて聖者が彼らが解放されるまでを扱っている。

前半部は、物語の舞台となるグリゴリーの菜園を享受者に提示した後、時間の軸によって展開する。

前半部	時間の軸	時間の軸からの逸脱要素	註
Имъаше же сей блажен- ный маль огадаецъ,идъ же зелие съаше и дръва продавита.			
И на се паку придоша татие,и егда възьяша емена своя,хотяше отъти,и не възмогоша.	придоша възьяша не възнем -гоша	時間の軸からの逸脱要素 導入的部分(エピソードの舞台を提示) Хотяше отъти [概括的把握+具体的情報] възьяшаの目的	
И стояше два дни неподвижими и угньтаемы бремены,и начаша въпити: (Господине Григорие,п-усти ны,уже покаемся гръховъ своих,и к тому не створим сичевы вещи.)	стояша начаша въп-ити	《Господине~вещи》[概括的把握+詳細の情報] въпитиの具体的内容	
Слышавше же черноризеци,и пришедше яша их,и не моглоша свести ихъ отъ мьста того.	Слышавше пришедше не моглоша		
И въпросиша ихъ:《Когд а съмо придосте?》	въпросиша	ръша,въпросишаのみでは物語の展開を担うことができない。従って、ここでは Direct Speech をも時間の軸に含める。	
Татие же рьша:《 Два дни и двъ ноши стоим здь.》	рьша		
Мниси же рьша:《 Мы всегда выходяше,и не видь хом вас здь.》	рьша		
Татие же рьша:《 Быхом мы видьли васъ ту,убо молилися быхомъ вамъ съ слезами,дабы нас пустил.Се уже изнемогоше,начахомъ въпити,нынъ же молит е старца,да пу стить нас.》	рьша		

この前半部を子細に見てみれば分かるとおりに、全体のほぼ5分の1の部分に、盗賊が聖者を襲い、呪縛に会い、助けを求めるといった筋が盛り込まれているが、私達は以降のD.S.を読み進めるにつれて、それが物語の経緯をすべて尽くしたのではないことを知る。盗賊の叫びを聞いて集まってきた僧侶達と盗賊との問答によって、私達の前に、奇妙な事実が明らかになる。盗賊達は金縛りに遇って、僧侶達に助けを求めるところが、盗賊達から僧侶を見ることはできるのに、僧侶の方から盗賊達は不可視なのである。

前半部に見られるこうした展開は、修道院教会の開基をテーマにもつ第1タイプ Novellaと全く一致している。即ち、作者が提出したある事実を起点(盗賊達の硬直=教会建築家達の到来)に、登場人物達のD.S.の食い違いを通じて、前出の事件がはらむより深い意味(聖者による呪縛=神意の介在)を浮かび上がらせるという構造上の長を、エピソード2の前半部は第1タイプ Novella前半部と共有しているのである。以上のような前半部に対して、後半部は各々展開の仕方が異なっている。つぎにその相違を子細に検討したい。

第1タイプ Novellaの場合、天意の導くままに教会建築家達がキエフに到来したことを示す前半部を受けて、後半部は、かれらがツァリグラードで若しくはキエフへの途次に遭遇した神秘的な出来事がかれら自身が物語するという形で展開した。つまり、前半部で提出した謎を後半部で解くという構造を基本的にとっているといつてよい。後半部における物語の中心は、このD.S.にあるわけだが、さらに、教会建築家達のその後を、ことにCл.4の場合、彼らが商品として運んできた大理石を教会に奉納したという小エピソードを、事後談の形で提出する付加的な部分が付属していた。以上のような第1タイプの場合に対して、エピソード2は、盗賊達と僧侶達の対話を通じて、盗賊達が叫びだすまでの経緯が子細に物語られた。ことに、盗賊達の最後のD.S.をみれば明らかな通り、第1タイプにあっては、後半部の中心となるべき謎の解決が、すでにエピソード2においては前半部で与えられている。かわりに、第1タイプにおいては、事後談として核部分に付属していたものが、エピソード2の場合、拡大されて後半部となるのである。

では、後半部を見てゆきたい。

見做すこと以外できない”という結論を導いたことに由来す
る。一方、アドリアノワ・ペレッツが歴史的なレアアを提
供するものとして挙げたのは、“修道院がかつて盗賊であつて
たもので働きの手として受け入れた”という記述に、この二人の研究
あつた。子細にみると、しかしながら、この二つの研究に
意見は、結局のところすれちがっているに過ぎないことに
気付く。

聖者に対して危害を加えようとする悪意をもった者が
が金縛りにあひ、当初の目的を達することができないという
モチーフを、ドイチェフはトポスと見做しているわけだが、
その一方で、アドリアノワ・ペレッツの指摘する“修道院が
かつて盗賊であつた者まで働きの手として受け入れた”とい
記述のもつ歴史的価値については、これを否定する根拠を
えていない。常識的に考えて、同一モチーフが教会文学に偏
在すること根拠に、こうした、物語の末節部に現われてい
るかもしれないレアアまでも否定することはできないであ
ろう。”このエピソードは何らの歴史的価値をももっていな
い“というドイチェフに断定には無理がある。私達はむし
ろ次のように考えるべきであろう。KППは、東方教会文学の文
学的伝統を縦軸とし、当時のキエフ・ルーシのレアアが横
軸に編み込まれて成立している、と。”修道院がかつての盗
賊までも働きの手として受け入れた“という記述が歴史的なレ
アリアを反映するものかどうかの真偽には、更なる考察が必
要であるにしても、「ある盗賊が五日間眠りより醒めず、別
の盗賊が二日間立ち続けたというファンタスティックな筋立
てに、修道院がたとえかつて盗賊であつたものであれ、働きの
手として受け入れたという習俗的な話が編み込まれたのであ
つた。」というアドリアノワ・ペレッツの見識は、中世文学の
研究の進展すべき方向を示唆するものとして高く評価すべ
きものなのである。

次に、KППに対する、翻訳文献の影響関係についてで
ある。

ドイチェフがこの論考を締めくくるにあたり、次の
ように述べている。「このエピソードが直接聖書から材を
とったものなのか、なにか教会文学に取材したものなのか、
確定することは難しい」と。ここで、ドイチェフが提示し
ている、キエフ時代における影響関係のふたつの形態を、ア
メリカの研究者プレステルは、聖者伝文学が本来もっている
地方的な性格とからめて説明を施している(#10)。

そもそも、聖者列伝とは、キリストの教えに従うこ

とになったある地域が、神の恩沢に浴している証拠として、徳の高い聖者を通して奇跡の成就に与っていることを広くしらしめる意図から生まれたものであるという。そのゆえに、聖者列伝には、このキエフのほかにもローマ、エジプトといった地名を関したものが圧倒的に多いのである。イスラエルの歴史を通して神と人間の交渉を克明に記した旧約聖書、この歴史に決定的な区切りを与えるイエスの事跡を追った新約聖書に対し、これらの聖者列伝はそれが舞台になった地域が聖書の歴史を継承するものであることを示すために編まれたのである。従って、これら聖者列伝と聖書との影響関係を図式化すると、聖書を中央におき、そこから、各聖者列伝に放射状に延びる直線を想定すればよいことになる。

一方で、キエフ・ルーシという時間的・空間的に限定された状況を、ここで考えなくてはならない。キエフ・ルーシはいうまでもなく、ビザンツ文明の圧倒的影響下において成立したものであり、多くのビザンツ教父の教説、聖者列伝等が翻訳された。モチーフ、テーマ、文体、構造、思想等において、これらの翻訳文献がなんの影響も与えていないということは、常識ではおおよそ考えにくく、現に、シモンによる物語の検討では、作者が影響関係を明言している箇所を一つ、翻訳聖者伝を断章取義した箇所を一つ、見いだすことができた。

基本的に、KIIIへの影響関係は、以上二つのタイプから成立しているものであり、この問題を考えるとき、これら二つの視点から同時に検討を行なわなくてはならない。

さて、このエピソードが列王記の記事と何らかの連関があることは確かである。列王記上13章には、つぎのよなエピソードが記されている。イスラエルの王ヤロブアムは金の小牛を崇めるといふ偶像崇拜の罪を犯した。エホバはこれを怒り、神の人を遣って、王に降り罹るであろう災厄をあげつらい、王を糾弾させた。この、神の人の激的な言葉に怒りを発した王が、神の人を捕えるよう命令をするため、腕を振り上げると、たちまち、腕は硬直してしまった。慌てた王は、神の人に取り成しを頼み、神の人の取り成しで、腕の硬直は直った。

両者の間では、神の人が聖者に対応する点(とはいえ、この神の人はこの直後、主の戒めを破ったかどで、ライオンに食い殺されている)で、アンタゴニストたちがかれらを殺害する意図を秘めている点が共通であるが、聖者伝では、襲撃者が多くの場合アラビア人、フン族など異邦人である点、い

Они же рьша: (Ты же, отче, аше даси что, то си не умрет) .	彼は言った。「あなたに父よ、何か下さしたらないば、このものは盗賊たちは、このひとを何かをもち去ろうとする、ものを分けてくれるように言った。」	рьша	
Се же глаголаху, хотяше и него взяти что, да разделять.	盗賊たちは、このひとを何かをもち去ろうとする、ものを分けてくれるように言った。」	глаголаху	хотяше~ [概括的把握 + 詳細の情報] 盗賊の目的
Григорий же рече: (И азъ дамъ, а сий не умрет) .	グリゴーリイは言った。「わたしがあげたとしてしよう。」	рече	
И въпроси ихъ: (Коею смертию осуждтънъ есть?)	グリゴーリイは彼らに聞いた。「どのような死に方を宣告されたのですか。」	въпроси	
Они же рьша: (На дръвь повышень хошетъ быти)	かれらは言った。「木に吊り下げられて給られたらう。」	рьша	
Блаженный же рече: (Дობрь осудите ему, заутра бо сий повьситься) .	至福のひとには彼らに言つた。「お前たちは上手にこの者を裁いたのだ。とは、明日この者は給られるのだから。」	рече	
И паку сниде в погрьбъ иде же молитву творяше да не како умъ ему слышать земнаго что, ниже очи его видита что суетных, -и оттуда изнесъ оставльшаа книги, дасть им, рекъ: (Аше не угодн о будетъ, възвратите ми) .	それから、もう一度穴蔵に降りていき、---そこを、かれの知が地上のものをお見たり、聞いたりせずに、祈ることができよう。---そこから残りの本を運び出し、かれらに与えて言った。「もし気に入らないのなら、わたしたしには返すのがよい。」	сниде	иде же молитву творяше [概括的把握 + 詳細の情報] (長いタームによる時間把握)
Они же, вземше книги, начаша е: (пролавше сие, и раздъллим собъ) .	かれらは書物を受け取るに笑いだして言った。「これを売って、山分けしよう。」	вземше	да не како ум~ творяшеの目的
Видьвше же древеса продовита, и рьша к собъ: (Придем в сию ношь и объемлем плоды его) .	果樹を見て、互いに言い合った。「夜にここに来て、果実をとろう。」	начаша глаголюше	рекъ: (Аше~) [概括的把握 + 詳細の情報]
		видьвше рьша	глаголюше: (Про давше~) [概括的把握 + 詳細の情報] 付带的状況

上述のコメンタリーを看れば明らかなおおり、時間の軸からの逸脱的要素が極めて頻繁に見いだされる。ことに、注目すべきなのは、[概括的把握+詳細の情報]による叙述の連結が多用されていることである。これら、[概括的把握+詳細の情報]

による叙述が担っているのは、おもに、登場人物の行動の動機であり、地の文によりすでに提出された登場人物の言動の具体的内容であった。即ち、これら[概括的把握+詳細の情報]による叙述は、物語に具体性という膨らみをもたらず役割をしているのである。

今一つ、[概括的把握+具体的情報]による連結によって時間の軸に結びつけられる да не како ум ~ が、修道生活を行なう者への教導的配慮を含んでいることは、特筆に値し

よう。そこでは、祈りを俗世から全く連絡を絶たれた状態で
 行なうことの意味が、洞窟を掘り、地下で暮らすという奇妙
 な生活形態をとってまでもそうした状態を作り出すことの必
 要性が、享受者である修道僧たちに示されたのであった。
 以上のように、因果関係及び[概括的把握+詳細の情報]による
 叙述を挟みながらも、エピソード4前半部は、基本的に時間
 の軸によって展開した。時間の流れは、情景のより詳細な描
 出を意図した叙述を編み合わせながらも、盗賊とグリゴリー
 イとの交渉をめぐる一元的なものに過ぎなかった。これに対
 して、後半部の時間の流れはより複雑なものである。まず、
 共通の属性をもつ一連の登場人物によって複数の時間の系が
 存在し、その各々は、作者の視点の転換により結合される。
 しかしながら、その視点の転換を支えるのは、例えば、Сл.29
 の場合のように、ある自由な連想関係に基づくものではなく、
 様々な立場の登場人物を巻き込む出来事を叙述するにあたっ
 て状況を整理して総合的に把握することを意図したものであ
 り、そこに現われるのは、物語を進行させるという役割のみ
 を担った純粋な語り手(僧侶としての価値観から解放されたと
 という意味で)なのである。

後半部前半箇所

Наставши же ноши,при- идоша сие трие и запро- ша мниха в погрѣбь,идѣ- же бѣ моляся. Един же,его рѣша на др- ѣве повѣсити,възльзѣ горь,нача торгати ябл- ки,и яся за вѣтвь:	夜が来ると、三人がや て来て、祈りをするこ になつてゐる穴蔵に僧 を閉じ込めた。 に絡まれるだろうと言 われたひとりの者が高 く登り、りんごをもぎ 始めた。---木の枝をつか んだ。	Наставше придоша запроша рьша възльша нача яся отломльшися устраившася отбѣгоша! лятя яться не имѣ удовися бо запрень бѣ! не обрътеся!	идѣ же бѣ моляся -я[概括的把握+ 詳細の情報] 登場人物から登場 人物への、時間的 前後関係を含まない視点 の転換 [(A)→(B)→(B)] (a)時間の軸 1 地上にいた 二人の盗賊 (б)時間の軸 2 縊死した盗賊 (в)因果関係 グリゴリーイ 状況の総合的な把握を意図
оной же отломльшися,а сии два устраившися отбѣгоша,сий же летя, яся ризою за другую вѣ- твь и,не имѣа пооши, удавися ожерелием. Григории бо запрень бѣ, и не обрътеся приити къ сушии братии въ цер- ковь.	その枝が折れた。このふ りは恐ろしいが、逃げ 出した。このものは落ち 途中で、別の枝に衣服め が掛かり、襟に首を締め られて事切れた。 グリゴリーイは閉じ込め られていたので、教会に 行く兄弟の許に、往くこ とができなかった。	отломльшися устраившася отбѣгоша! лятя яться не имѣ удовися бо запрень бѣ! не обрътеся!	(a)時間の軸 1 地上にいた 二人の盗賊 (б)時間の軸 2 縊死した盗賊 (в)因果関係 グリゴリーイ 状況の総合的な把握を意図

先に述べたように、地上にいた盗賊、縊死した盗賊、
 各々による時間の系に対して、因果関係によってグリゴリー
 イが盗賊を助けにいくことができなかつた理由が提出されて、
 盗賊の縊死という事件が扱われた後、次の後半箇所では、グ
 リゴリーイと盗賊達とによって一元的な時間の軸が構成され
 ている。

っている。②生じた出来事を総合的に把握する意図のもとに、異なる時間の系列間を、登場人物から登場人物への時間的前後関係を含まない視点の移動を行なって、叙述を展開するケースを除き、基本的に物語は一元的な時間の軸によって展開している。しかしながら、③こうした時間の軸は、逸脱的要素を多く含み、これら逸脱的要素の多くは、因果関係による叙述の展開・[概括的把握+詳細の情報]による叙述の展開であり、いずれも物語に膨らみを与えるレリーフの役割をしている。時間の軸とその逸脱要素との関係は、二次元的なイコン画の世界と三次元的なレリーフとの関係に比すべきものがある。物語の末尾では、④回顧的な視点が積極的に導入されて、物語を締める枠の働きをしている。さらに、⑤物語は教会文学のトポスに多くを負っているものの、プロットの展開からずれた末端のディテールには歴史的なレアリアを匂わせる記述も散見される。以上である。

エピソード 4

聖者グリゴリーの死を扱うこのエピソード4は、エピソード3末尾に引き続き、読者と聖者をより密接に繋ぐ役割を果たす回顧的な視点が導入されて開始されている。物語はこの回顧的視点によりエピソードの開始を告げる導入部からただちに物語の核心部分にはいるが、その核心部分と導入部は[概括的把握+詳細の叙述]の関係で連結している。核心部分は、グリゴリーの死をめぐる前半部と死後の奇跡を扱う後半部分からなる。このエピソードの焦点はいうまでもなく、グリゴリーの死という事件であるはずだが、エピソード1ですでに触れたとおり、時間の軸に対する叙述の集中度が落ちた結果、物語の求心性が失われ、事件そのものの劇的性格は弱められている。むしろ、物語のウエイトが、ロスチスラフ公とグリゴリーとの掛け合い(世俗権力者の横暴な態度を印象づける)、受難にあったグリゴリーの威厳に満ちた遺骸の様子(聖者の徳を印象づける)等にあることは明らかであり、このことはとりもなおさず、叙述が具体的な細部の提出により物語の描出性を高めることを指向していることを示している。

核心部分に入ると、叙述の軸は明らかに回顧的視点を離れるが、その中心は容易には定まらず、物語は、グリゴリーをめぐる時間の系と、ロスチスラフをめぐる時間の系と、この二つに叙述の端緒をもちながら、やがてこれらが合

うか。ルカ伝18章からの引用「私を反対者からお守りくだ
さい」にあちへの怒りなは、悲運の聖者グーリイを殺す
したもののコンテキストはここにはほとんども無視されて
新約聖書なる。

さらに、「小きものに対して腹を立ててはいけな
い。」という文も興味深い。ここで言う「小きもの」とは
は、無論、聖者グーリイのこどだが、様々な超自然的能
力をよって幾多の悪人どもを苦しめ落ちない。このコン
「小きもの」と神の御前にて”「小きもの」というニュ
スでもない。それは、口スチスラフ公の手で敢えなく殺
たグリゴーリイの悲運を指して言っているところ考
え方相
い。

従って、物語全体の結びとなるはずのこの箇所は、
物語を総括するものと言ふよりも、エピソード4の雰
そのま引きずって、横暴な世俗の権力者達や不条理な
に對する憤りをにじみださせたものと言ったほうがよ
う。語り口の静かさの裏に、込められているのはか
い感情である。これは、シモンの物語の場合のよう
尽くした説論とはいささか趣を異にしている。

以上のように、必ずしも聖書の文にポリカルプが
通じていかなかったのではないかという疑懼、支配者に
る根深い反発の情、これらは、ポリカルプが、当時の
指導者の一人であったシモンとは全く異な
る境遇に育った人物であることを示唆しているのでは
いか。

最後に、以上において検討してきたことを簡潔にま
とめてみたい。

①物語は、道入部・4つのエピソード・説教の文体
によりなる付加的な部分、によってできている。

②エピソードはほとんど時間の軸によって展開され
るが、時間の軸からの逸脱的要素が多く散見される。これは、
作者が、物語のプロットよりも場面場面の描出性に意を用
て、物語を展開した証と考へる。物語は美的な享受の方向
へ歩みだしているのである。

③物語は、ドゥイチェフの指摘する通り、東方聖者
伝のモチーフを豊富に含んで展開されている。しかしながら、
このことは修道院内外の現実が物語のなかに反映されること
を妨げない。修道院の最底辺を構成する者たちの出自を

め、キエフ・ペチェルスキー修道院聖者列伝は、当時のキエフ・ルーシのレアリアを豊富に含んで成立している。

④シモンによる物語と決定的に異なる点であるが、この物語においては、聖書からの引用が聖書のもとのコンテキストに添わないものが大半である。これは、ポリカルプが必ずしも聖書に精通していなかった、少なくとも、正当的な知識をもっていなかったのではないかという推測を濃厚に裏づけるものと思われる。これはСл.30の考察からも得られる結論である。

Сл.30 至尊のモイセイに まつわる話

恐らく、この物語以上に現代の読者の鑑賞から遠いところにある作品は、キエフ・ペチェルスキー修道院聖者列伝のなかでも稀であろうと思われる。フェードトフは、修道僧を陥れようと跳梁する悪魔や憑き物がこの聖者列伝のなかに頻繁に現われることを指摘して、修道院を包む神秘的な、と言うよりも、どこか怪奇とさえ言い得る雰囲気について言及している。「ここでは(キエフ・ペチェルスキー修道院列伝 訳註)、すべてが陰鬱で過剰なのである。魔術的・鬼神崇拝的な雰囲気満ち溢れている。」(#15) この物語に登場するのは、悪魔でもなにかの憑き物でもなく、いずれも生身の人間である。しかしながら、フェードトフが“陰鬱で、過剰”と評したこの物語群のある側面を如実に現わしているのは、悪魔が登場してひとしきり人間をたぶらかした後聖者の徳によって退散していく類の物語ではなく(例えば、Сл.28グリゴリーがそうであった。)、聖者モイセイの頑なさにしろ、リヤヒの女の執拗さにしろ、図らずも、中庸を忘れた人間の情念の奥深さを露わに描きだすことになったこのСл.30のような物語なのである。

構造

導入部	エピソード1	エピソード2	エピソード3	エピソード4
主人公モイセイの提示	リヤヒ貴頭女の求愛がモイセイは拒否	モイセイが女に結婚を拒む強要される	仲間の膚がモイセイに結婚を勧めがモイセイは拒否	女が財を誇って強誘い、結婚がモイセイは拒否・拷問
長いターム・短いタームの混在	前半 = 時間の軸 後半 = 対比の軸	前半 = 時間の軸 後半 = 対比の軸	対比の軸により 叙述	前半 = 時間の軸 + 対比の軸 後半 = 対比の軸

エピソード5	エピソード6	エピソード7	付加的部分
リヤヒの王ボレの誘惑を退け、拷問を受ける。受ける点	女の誘惑を退け、拷問を受ける。受ける点	情欲に負けた修道僧を助ける	教訓の提示
対比による叙述の軸	時間の軸	時間の軸	Нравописательный стильによる説教

以上に示したように、物語は導入部と7つのエピソード、さらに、教訓の提示を担う付加的な部分からなり、各々のエピソードはほぼ全面的に時間的な前後関係に従って配列されている。先の分類に従えば第2のタイプである。

この表を見て、すぐに気付かれるとおりに、モイセイの拒絶がこの物語の中心的な主題である。ルーシの公達の間、権力闘争に巻き込まれて虜囚の身になったハンガリア人モイセイは、あるリヤヒの貴顕の未亡人に求愛されて、様々な誘惑を受けるが、これを拒否し続け、ついには、自ら進んで修道僧になり、言語を絶した迫害を受けながらも、神の加護により、リヤヒの騒乱に乗じて洞窟修道院に逃げ込む。各々のエピソードは、様々な場面で様々な人々から様々な世俗的誘惑を受けながらも、一分の心の揺れを見せることなく、清貧に甘んじたモイセイの受苦の様を一貫して描き出していくことになる。その際、モイセイと、リヤヒの女をはじめそのほかの人々との、永遠に妥協点を見いだすことのない言い分の食い違いから、モイセイの揺るぎない、あるいは、頑な心が描き出されていく。基本的に、この対立関係こそが、性に関するドグマチックなイデオロギーを担って、物語を根底から支える力となっているのである。ほとんどのエピソードはこうしたダイアローグを基調に展開されている。

対話を基調として、物語が展開していくということとは、一方で、時間の展開の上でのダイナミズムに乏しいということの意味している。なぜなら、対話が継続する短い時間のなかにエピソードが閉じ込められているうえに、こうした対話が指向するのはドグマの表出であり、それらによっていずれかの内面が変化するということも、聖者の物語という性質上、ありえないからである。(こうしたBiographic taleのスタティックな性格についてはすでに修士論文で指摘してある)そして、こうした対立・対比・対照の構造は、登場人物間の性格、内面ばかりではなく、叙述の隅々に行き渡ることになる。СЛ.28のところで、わずかに触れたとおりに、この物語の叙述の軸は、対比なのである。

ここで、対比を叙述の軸に同定する際に留意する点を以下に簡潔に整理したい。これは、ほぼСЛ.28末で扱った内容と同じである。まず、叙述が、相容れない価値観の対立から成っていること、さらに、これらを統合するより上位の価値観・概念・機能(ことに、物語を展開する)をもたないことが、対比の軸として同定されるには必要であ

る。以下に、分析を行なっていくと分かる通り、対比の構造は入れ子的に積み重なって重層的に叙述を形成する場合が多い。

主人公モイセイの紹介を担う導入部は、歴史的次元で捉えるべき長いタームをもつ時間の把握、物語規模の短いタームをもつ時間の把握が混在し、せめぎあって、極めて複雑な叙述の構成になっている。こうした複雑な叙述の構成は、Biographic taleの導入部に特徴的な現象であった。これは、例えば、今まででも、Сл.27がそうであり(聖者アガピットの生涯を捉える長いタームをもつ時間の把握・物語の対象とする出来事を記述するための短いタームをもつ時間の把握)、また、コメンタリーでわずかに指摘するに留めたが、同様なことが、Сл.28の場合にも言うことができた。

しかしながら、それらはすべて、聖者の生涯と個々の出来事という対照によってもたらされる違いに過ぎなかった。ところが、このСл.30の場合、対照はまさに歴史対個人という図式の上で行なわれている。やがて、明らかになるとおり、この物語は根底において、天上-現世・僧侶-世俗の人々・(現世的レベルでの)貧困-栄華・個人の意志-封建的な秩序感覚等種々の対立関係を内蔵しており、それらがいずれも、その代表をモイセイにもつ側か、リヤヒの女にもつ側か、どちらかに帰属を求めることになり、それが叙述の上にも現われて、この物語は多くの場合、対比を叙述の軸に求めて展開することになった。この、歴史と個人という対比もそのひとつの例ということができるが、これは同時に、一人の人間と一個人をはるかに越える運命的な力の相克という、ポリカルプが無意識ながらも、しばしばとりあげた疑似バロック的なテーマを展開するのに格好の土俵であったということが出来る。

Увьдано бысть о сем
блаженньм Моисии Угринь,
яко любимъ бь святым
Борисом.

Сей бо бысть родом угр-
инь, брат же Георгия, на
него же святыи Борисъ
възложи гривну злату:
его же и убиша съ свят-
ым Борисом на Алтъ и
главну его отрѣзаша зл-
атъа ради гривны.

この至福のひとハンガ
リア人モイセイについ
て、このひとが聖ボリス
に愛されたことが知られ
ている。
このひとはハンガリアの
生まれであり、ゲオルギ
アの弟であつたが、聖ボ
リスはこのゲオルギイに
金の首飾を授けた共には
ある。聖ボリスと共には
ルタ河畔でこの金首飾を
さされて、このひとは
ゆえにこのひとなつた。

【モイセイに関する叙述の系
—主人公モイセイの提示】

連想による叙述
の展開

(Сей бо~Георгия)
[ゲオルギアに
関する時間の系]
възложи ↓
убиша ↓時間の軸
отрѣзаша!

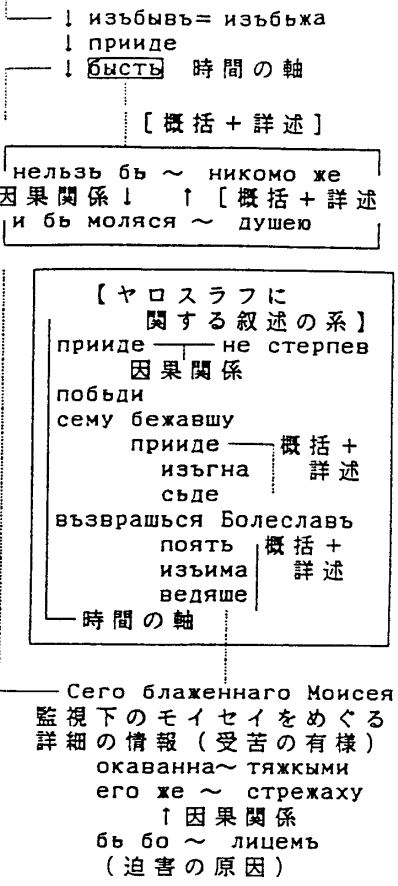
16

Сей же Моисии единъ из-
 бывъ от горкыа смерти
 и горкаго заколения и-
 збъжа,и прииде къ Пред-
 иславъ,сестръ Ярослав-
 и и бысть ту.
 И въ дъни тьи нельзъ
 бь преходити никамо же,
 и бь моляся богу крьпк-
 ый той душею,донде же
 прииде благочестивый
 князь нашъ Ярославъ,не
 стерпвъ теплоты душев-
 ныа еже къ братома си,
 на безаконнаго,и побьди
 безбожнаго и гордаго
 и окааннаго Святополька.

このモイセ
 ーイ、れ、
 ー命を逃
 ーの妹ブ
 ーにやっ
 ーまこ
 ーをる
 ーる
 ー没頭
 ーの人
 ーか
 ーれぬ
 ースウ
 ーした。

Сему же бежавшу въ Лях-
 ы,прииде пакы съ Болес-
 лавом и изъгна же Ярос-
 лава,а сам съде в Киевъ
 И възвращься Болеславъ
 въ Ляхы,поятъ съ собою
 обь сестръ Ярославли и
 изъима же и боляре его
 с ними же и сего блаже-
 ннаго Моисея ведяше ок-
 ованна по руць и по но-
 зь жельзы тяжкыми,его
 же твердо стрежаху,
 бь бо крьпокъ тьлом и
 красенъ лицемъ.

この者ハ
 ーれ、や
 ーびを
 ーエ
 ーそれ
 ーリヤ
 ーヤ
 ーを
 ーイ
 ー打
 ー。は
 ーた



主人公モイセイと聖ボリスの関係が述べられて、
 モイセイの紹介が極く簡潔に行なわれた後、叙述は、ルー
 シの地に起こった大事件についてへと発展し、ボリスとグ
 レープの殉教の際、この悲運の兄弟と運命を共にしたモイ
 セイの兄弟ゲオルギアに関する不幸なエピソードが提出さ
 れる。このゲオルギアに関する小エピソードは、以後の物
 語の展開とはまるで無関係なまま、ほとんど脱線のような
 形で、置かれていることから、この部分は物語を進展させ
 る何らの機能を負うものではないといえることができる。従
 って、冒頭の"Уведано бысть ~ Борисом"と、この小エピ
 ソードを扱った"Сей бо ~ гривны."は極めて自由な連想
 関係によって連結すると結論付けることができるのである。
 このエピソードが原初年代記に記載されたものと
 同じであり、両者にほとんど直接的な影響関係があったこ

とは紛れもないが、物語の筋じ立て及び背景の構成にはまるで無関係にこの小エピソードが提示されたのは、ルーシの歴史を綴る著名な出来事・人物との関連において主人公モイセイを位置づけようとする作者の配慮にほかならない。これは、先に述べた聖者伝文学の地方的性格にかかわる問題である一方、歴史の怒濤のなかに巻き込まれた人間の無力さと、その人間に許された最後の意志という極めてパロディック的な問題の端緒を提供したものと見える。(恐らく、ポリカルプ自身はそのことを意識していなかったであろうが。)

やがて、叙述はゲオルギアをめぐる逸脱から戻り、かろうじて形成される時間の軸にしたがってモイセイの身辺に生じた、いわば個人的な出来事が提出される。モイセイは死を逃れてヤロスラフ公の妹(或いは姉)のもとに身を寄せるが、そこで重要な心境の変化が訪れる。行き場を失って、彼は祈りの中に安住の地を見いだすのである。

モイセイの身辺に生じたこれらのことに並んで、今度は再び対象を歴史的事件に移し、叙述が展開される。ボリスとグレーブを非業の死に追いやったスウィアトスラフを討つため、ヤロスラフはキエフに襲来し、一度は勝利を取めるが、リヤヒの王ボレスラフと連合したスウィアトスラフに敗れ、多くの者達が虜囚になる。この部分において、叙述は、時間の軸を基調に[概括的な把握+詳細の情報]が折り込まれて成立する。この歴史的な事実に対する言及から再び叙述はモイセイへと戻り、捕われの身になったモイセイの有様が描き出される。枷を打たれ、厳しく監視されたモイセイの姿こそ、これから展開されるすべてのエピソードを用意するものであり、かれの受苦の有様が具体的に描き出されて、それらの欠くべからざる背景を作るのである。

Сего же видѣвши жена нькаа от великих, красн- а суши и юна, имуши бог- атьство много и власть велию. И та убо, примши въ ум- ь видѣннѣ доброту, уязв- ися въ сердце въждельн- ием, еже въсхотѣти сему преподобному.	このひとのこゝとを、ある 貴頭、の美しく、若く、 多くの財産と大きな権勢 をもつ女性が見初めた。 この女は、このひとのり しい姿を記憶に留め、 の至福の人を我がものに したいという欲望に心 を傷つけられた。
--	---

時間の軸
видѣше

примши
уязвися

時間に軸からの 逸脱要素 --- нькаа от великих красна суши и юна имуши богатство ~ велию 女に関する詳細な 情報・物語の背景
--

半部分と異なる点は、前半部分では Direct speech によって何らかの形で事態が推移していった(モイセイが女が自分に行為を寄せていることに気付く)のに対し、ここでは、各々の内面がこれら Direct Speech に写しだされるものの、事態の進展を生むことが決してない点である。即ち、これらは初めから、異なる内面の対比を明らかにするものとして、対立するものを対立するままのかたちで提出しているのである。それを具体的にいえば、女に代表される、俗世の栄華をなんの抵抗もなく受け入れ、これを享受する権力者の立場と、モイセイに代表される、神の身許へとより近づくために世俗の幸運を軽侮し、これを捨てて省みない修道士の立場との、決して解消されることのない対立である。このエピソードの後半部は、こうした対比による叙述の軸によって展開されている。

次のエピソードもまた、モイセイの志操堅固な態度に関するものであるが、基本的には時間の軸によって展開し、この時間の軸による叙述の間に、対比の軸による叙述が挟み込まれて成立している。

エピソード 2

<p>Тогда жена, видявше себе лишена такова красота, и на другой съел диаволь приходит, помысливши сице, яко: { Аще искуплю его, всяко и не волею покорить ми ся }</p>	<p>このとき、女はこれのよこのりりし、さがが失われ、たこのりりしい、さ、が、が、魔の別、い、いた、が、悪、傾、け、づ、いた、が、耳、を、し、も、さ、さ、や、き、に、も、し、も、か、れ、を、し、も、こ、う、考、え、た、。「受、け、だ、し、こ、も、し、も、ば、い、や、な、が、た、ら、で、も、わ、た、し、の、い、う、こ、う、に、従、う、よ、う、に、な、る、だ、ろ、う。」</p>	<p>видявши приходит помысливши~ 【概括+詳細】 съветъの具体的内容</p>
<p>Посылают же къ дрѣжшому того, да възмет у нея елико хошет, Моисея же прѣдасть ей. Он же видявъ улучшение времени и богатства приобрѣтение, и взя у нея яко до 1000 гривенъ сребра, Моисея же прѣдасть ей.</p>	<p>このひとを捕えて、欲しいものを送り、モイセイに引き渡す。富を得る機会が近づくと、1000グリの銀でモイセイを引渡した。</p>	<p>посылают да възмет ~ 【概括+詳細】 посылаютの目的 女の行為の動機 улучшение времени и богатства... взя# 行為の性格付けは慮囚番の視座から行なわれている прѣдасть (語り手は特定の価値観に拘束されない)。</p>
<p>И съ нужею бестудне влечаше его на дѣло не преподобно.</p>	<p>そして、恥知らずにも無礼矢理このひとをふさわしくからぬ行為に引き入れた。</p>	<p>влечаше 概括的把握 ↓ 詳細の情報</p>
<p>Яко се власть приемши на немъ и повълеает ему причитатися себе, и раздрѣшивши же его от узъ и въ многоченныя ризы его облъкъши и сладкими брашны того кормяще, и нуждением любовнымъ того объемлющи, на свою похоть нудящи.</p>	<p>このひとを手中に収め、このひとに命じ、豪華な装束を着せ、甘い菓子もてなして、自分の意のままにしようとした。</p>	<p>приемши — 希薄な時間の流れ повълеает ↓ раздрѣшивши, облъкъши, кормящеは同義的価値を持つ行為として並列 ↓ объемлющи ↓ 以上の諸行為を総括するものとして нудящи</p>
<p>Сей же преподобныя, видявъ неистовство жены</p>	<p>この至福のひとは、この女の不賤な振舞いを見</p>	<p>↑ 対比 ↓ видявъ ※ неистовство, бога ради, съ скверноюは僧侶としての価値観に基づく行為の性格</p>

<p>тоя, молитвь и посту прилежаше паче, вкушаа въ бднии, и изволивъ паче сухой хльбъ бога ради и воду съ чистото- ю, нежели многоцънное брашно и вино съ сквер- ною.</p> <p>И не токмо себе срачиц- и единою съвлече, яко же Иосифъ, но и всъх ризь себе съвлече, и из- бъжа от гръха и ничто же въмъни житие мира сего, и на таку ярость подвиже жену, яко и гла- дом уморити его.</p> <p>Богъ же не оставляетъ рабъ своих, уповающихъ к нему.</p> <p>Нъ котораго бо от рабъ жены тоа на милость преклони, и в тайнь под- аваше ему пищу.</p>	<p>て、ますます祈りとなつた。断 食の爲に、すまよ、す干、りな 神の爲に、むむ、よ、干、な、つ と、きれ、い、な、水、の、び、た と、き、な、い、な、水、の、び、た より、も、好、ん、だ。</p> <p>イオシフのよ、うに、た 一枚のわぬば、ツ、を、さ、え、だ に纏ふべ、す、か、ぎ、り、を、か、て、も、身、物 を、身、守、り、を、何、と、も、思、わ、せ、る、罪 の、生、を、何、と、も、思、わ、せ、る、者、を、求、め、ら、な せ、よ、う、と、思、わ、せ、る、者、を、求、め、ら、な し、の、女、を、自、ら、お、見、捨、て、に、な、ら、な い。</p> <p>この女の情を、ひとりに憐 れみの情を、もよおさせ、 その女が、このひとに秘 に食物を運んだ。</p>	<p>прилежаше = вкушаа изволивъ</p> <p>付け ※ не токмо ~ Носи- фъ — но и ~ съвл- ече 単なる並列では ない(拒絶の度で合 の深さが決まると の流れるはここの の叙述の侶と決ま は僧侶に決定されて は強い教導的 対意図をもつ</p> <p>教導的文言</p> <p>преклони — 同一事柄に対して подаваше — 二つの視点から描 く(婢の行為を天 上、地上の二つの 視点から描く。)</p>
--	---	---

エピソード冒頭から“～ на дело не преподобно”

までは、видѣвше, приходит, посылают, видѣвше, взя, предас-
тъ, влечахуによって形成される一繋がりの時間の流れのな
かで叙述が進められている。

時間の軸を構成する要素として挙げた以上のもの
を、子細に看ると、そこにある傾向があることに気付く。
まず、第一に、“на другой съвьтъ диаволь приходит”(悪
魔の別のささやきに耳を傾けて)、“влечаху его на дьло
не преподобно”(ふさわしからざる行為にこの人を引き入
れた)等、登場人物のある行為を書き留めるにあたって、
単に行為そのものを外面的に描出するに留まるのではなく、
僧侶としての価値観に深く付いた根づいた行為の性格付け
が行なわれることである。即ち、この場合、語り手は創作
活動を離れても存在する作者像に極めて近い位置にいるの
である。しかしながら、同時に、“видѣвше себе лишену
таковыа красоты”(そのようなりりしさが失われて)ではリ
ヤヒの女の立場から、“видѣвше улучшение времени и
богатъство приобрьтение”(富を得る絶好の機会が近づい
ているのを見て取り)では虜囚達の見張りの立場から、出
来事あるいは行為が捉えられ、性格付けが行なわれている。
語り手の内的な視点は、この場合、特定の価値観に拘束さ
れていないのである。つまり、語り手は、ここでは、僧侶

としての価値観に深く影響を受けていながらも、決してそこに隷属することなく、必要な場合には、そうした僧侶としての価値観を振り払って登場人物の内面に潜り、物語に、深い彫り(高度の具象性)を与えているのである。今まで扱った物語、殊にシモンによるそれにおいては、語り手は単に、報告者(ある特定の価値観に縛られた、出来事・登場人物の行為の)・Direct Speechの設定者として、物語を裁量しているに過ぎなかった。ところが、ここでは、語り手は本来の、フォークロア的ともいえる内的な視点の自由な移動を回復しているのである。これは、ディテールへの指向と共に、ポリカルプによる物語に特徴的な語り手の機能の多様化・複雑化を示すひとつの例といえる。

以上のように、時間の軸により展開し、リヤヒ女の *дѣло не подобно*への言及に至った叙述は、一群を形成して、[概括的把握+詳細の情報]の関係で次の部分に連結する。先に言及された *дѣло не подобно*を具体的に描出した箇所につき、この女の行為に対立するものとして、モイセイの相も変わらぬ拒絶が提出されるのである。

ここで、子細にこの部分を検討してみることにしよう。

まず、“*Яко се ~ нудяши*”では、女がモイセイの心を得ようとして、モイセイに施した数々の恩恵が提出されている。これは、*повълевае*→*раздръшивши*→*облъкъши*=*кормяше*→*нудяши*と、実質的にはほとんど時間的な前後関係を含まない女の行為を時間的前後関係に従って、と言うよりも、時間的前後関係を装わせて、再構成したものであり、これらはひとつの小さなエピソードを形成して、女が甲斐甲斐しくモイセイをいたわる、ある意味で極めて叙情的な情景の描出を担当する。こうして描き出された女のみめやかな振る舞いに対して、“*Сей же ~ житие мира сего*”では、モイセイの荒くれた拒絶が扱われる。モイセイは、ユロージヴィさながらに、女の差し出す奢侈を遠ざけるのである。

まず、この部分では、*неистовство*・*бога ради*・*съ скверною*等、行為の性格付けが、僧侶としての価値観・教導的な意図に基づいて行なわれる。同様に、教導的な意図は、“干涸びたパンときれいな水”×“高価な菓子と汚れたワイン”の対比(女-モイセイと言う大きな対比の構造のなかに入れ子的に仕組まれた小さな対比の構造)、*не токмо ~ ,но и ~*におけるモイセイの行為の配列(程

втором браку причтатис-
 я. Ты же, не имба обычаа
 мнишеска но свобод сья
 того, почто злым и горк-
 ым мукамъ вдаешися, или
 что ради стражеси? Аще
 ти ся лучить умрѣти въ
 бѣдѣ сей, то кою похвал-
 у имаша? Кто же ли от п-
 рвѣхъ и доннѣхъ възгнуш-
 ася жень, развѣ чернецъ
 ? Авраамъ и Исаакъ и Иа-
 ковъ? Иосифъ же в малѣ
 побѣдивъ и паку женою
 побъжень бысть. Ты же н-
 ынъ аще съ животомъ го-
 нѣнъ неши, женою же паку
 обладанъ будеша, и кто
 не посмѣеться твоему б-
 езумию? Уне ти есть пок-
 оритися жень сей и сво-
 бодну быти, и господну
 быти, и господину быти
 всему).

Он же глагола им: (Ея,
 братие и добрии мои др-
 узи, добръ ми съвѣщавае
 те. Разумью, яко лучши з-
 мина нашептаниа, еже в
 раи Евзъ, словеса предл-
 агаете ми. Нудите мя
 покоритися жень сей, но
 никако же съвѣта вашег-
 о приму. Аще ми ся луч-
 ить и умрѣти въ юзахъ
 сихъ и горкыхъ мукахъ, вся-
 ко чаю от бога милость
 прияти. Аще и вси праве-
 дници спасошася съ жен-
 ами, азъ же единъ гръше-
 нь есмь, не могу съ жен-
 ою спасатися. Но аще бы
 Иосифъ повинуль ся жен-
 ь Петерьфинъ, то не бы-
 сий потомъ царствоваль:
 видѣвъ же богъ терпѣние
 его, и дарова ему царст-
 во, тѣмъ же и въ роды хв-
 алимъ есть, яко цѣломудр-
 ь, аще и чада прижит.
 Азъ же не Египетъкаго
 царства желаю приати и
 обладати властью, и ве-
 лику быти в Лясахъ, и че-
 стну явитися въ всей
 русской земли, — но вы-
 шняго ради царства вся-
 си приобидѣхъ. Аще же съ
 животомъ избуду от руки
 жены сея, то чернецъ бу-

и же, не имба обычаа
 мнишеска но свобод сья
 того, почто злым и горк-
 ым мукамъ вдаешися, или
 что ради стражеси? Аще
 ти ся лучить умрѣти въ
 бѣдѣ сей, то кою похвал-
 у имаша? Кто же ли от п-
 рвѣхъ и доннѣхъ възгнуш-
 ася жень, развѣ чернецъ
 ? Авраамъ и Исаакъ и Иа-
 ковъ? Иосифъ же в малѣ
 побѣдивъ и паку женою
 побъжень бысть. Ты же н-
 ынъ аще съ животомъ го-
 нѣнъ неши, женою же паку
 обладанъ будеша, и кто
 не посмѣеться твоему б-
 езумию? Уне ти есть пок-
 оритися жень сей и сво-
 бодну быти, и господну
 быти, и господину быти
 всему).

когда же глагола им: (Ея,
 братие и добрии мои др-
 узи, добръ ми съвѣщавае
 те. Разумью, яко лучши з-
 мина нашептаниа, еже в
 раи Евзъ, словеса предл-
 агаете ми. Нудите мя
 покоритися жень сей, но
 никако же съвѣта вашег-
 о приму. Аще ми ся луч-
 ить и умрѣти въ юзахъ
 сихъ и горкыхъ мукахъ, вся-
 ко чаю от бога милость
 прияти. Аще и вси праве-
 дници спасошася съ жен-
 ами, азъ же единъ гръше-
 нь есмь, не могу съ жен-
 ою спасатися. Но аще бы
 Иосифъ повинуль ся жен-
 ь Петерьфинъ, то не бы-
 сий потомъ царствоваль:
 видѣвъ же богъ терпѣние
 его, и дарова ему царст-
 во, тѣмъ же и въ роды хв-
 алимъ есть, яко цѣломудр-
 ь, аще и чада прижит.
 Азъ же не Египетъкаго
 царства желаю приати и
 обладати властью, и ве-
 лику быти в Лясахъ, и че-
 стну явитися въ всей
 русской земли, — но вы-
 шняго ради царства вся-
 си приобидѣхъ. Аще же съ
 животомъ избуду от руки
 жены сея, то чернецъ бу-

なく、苦に幸とけ人まのヤ女てかをいのをる
 あなむいめ不た受の今たかはがい女とこ由な
 りす辛たのっをえがっくめやなびだ。自に
 にわてくこのな賛し誰嫌サじ、は再操かて主
 の関く酷何もに称にのみイはがでて節うっの
 なにな、しとうい外忌かもたたび無るなの
 れみけてねもこい。以をムフっし延、あにもだ
 そし受し委。ぬうか僧女ハシ勝屈きもがりるの
 。勤をうをか死どの、どヲヨちには生て者通ゆい
 の縛ど身ので、うちほウかにのたとしてうら賢
 い僧束、にむかでもいうれアか。フ愛女のたど笑言、あうが
 てはのにみしなてとのこ。アかにのたど笑言、あうが
 じたそのし苦のしるとのこ。アかにのたど笑言、あうが
 じたそのし苦のしるとのこ。アかにのたど笑言、あうが

だ。Что же убо въ Еуанг-
 елии Христос рече? (Вс-
 якъ, иже оставит отца
 своего и мать и жену
 и дъти и домъ, тъя ест
 ь моя ученикъ) . Христа
 ли паче послушати или
 вас? Апостоль же глагол-
 еть: (Оженивыйся печет
 ься, како угодити богу
) . Въпрошу же бо вас:
 кому подобаеть паче
 работати — Христу или
 жень? Пишет же: (Раби,
 послушайте господия св-
 оих на благое, а не на
 злое) . Буди же разумно
 вам, держащим мя, яко ни
 коли же прельстит мя к-
 расота женьскаа, ниже о-
 тлучить мене от любве
 Христовы) .

てがにリ? を子こ、かいしり召な働妻るにに良してわり遠に
 ぎと僧キか家弟うか分てに独にあにかいととがくつがキをた
 生こはでの、の言のいいう、氣』めトてここうた遣さ、しが
 るしかる供しのい言言よるお。たスれきき従わをしとくた
 もれたない子たトいののはのくのりかし良には気美こたなう
 し逃わのて、わすが方伝どら神碎誰キ書悪、人たれのぬわある
 もら、書っ母、リうた行は入てを、に、く、主がこ女せら、あ
 。かば音言、そキほな徒者にしろうくか、よ、な、のた、は、ら、な、あ、が、喜、愛、こ、り
 だ手ら福と父こ』たあ使帯氣にこ聞のよ、は、ら、な、あ、が、喜、愛、こ、り
 ののな。何の者。いも、妻にかこにたき次僕てて』とさしへ得解
 る女たうはらたる聞とた』妻いにたき次僕てて』とさしへ得解
 いの来ろト自てあをれま。らはかがべか? 『いい。こたくトけお
 こ出なス『捨でとそ? するた者すたくか? つついい。こたくトけお
 ずか? 『いい。こたくトけお

23

24

25

以上がエピソード3の全体であるが、すでに明らか
 かなとおり、モイセイに結婚をするように説得する立場の
 者たちの主張と、モイセイ自身の主張とが並列されること
 によつてのみ、この箇所は成立している。モイセイのアン
 タゴニスト達が、他のエピソードにおいては、世俗的な榮
 華を条件とすることによつてのみ彼の妥協を引き出そうと
 するのに対して、この箇所は、いずれの側も聖書の文言・
 故事を引用する丁々発止の論戦であり、作者がアスケティ
 シズムの正当性の理論的根拠を求めて、これを展開してい
 ることは明らかである。

しかしながら、この箇所を、両者の立場に代表され
 るふたつの考え方の優劣を競う場として見た場合、それ
 は決してフェアな議論の場とはいえないであろう。反論の
 余地がもはやないほど十分に議論されたわけではないのに、
 前者の立場は自らを擁護する機会を与えられないからであ
 る。ところが、反論の余地が与えられない点では、同様に
 対比による叙述の軸によつて物語が展開した、Cl.20スヴ
 ィアト一シャにおけるスヴィアト一シャとペトルとの対話
 も、この物語の場合と変わらない。以上、二つの物語につ
 き、この点をさらに詳しく比較してみたい。

激しい労働と節制に身を委ねて厳しい修道生活を
 送り、憔悴したスヴィアト一シャを諫めて、チェルニーゴ
 フの公であった彼のかつての侍医ペトルは、「神は人間の
 限界を越えた断食や労働をお望みになっておりません。神
 がお望みになっているのは、清らかな悔い改めたる心だけ

です。」と、この聖者を論ず。これに対して、ペトルは答える。「兄弟ペトルよ、何度も考えをめぐらせた挙げ句、自分と戦うことがないようにと、激しい労働にさいなまれた体が魂の平安を見いだすようにと、自分の體のこゝろを気にするのはやめようと心に決めたのだ。」そして、世俗の世界に残って彼の帰りを待ち侘びる家族のことを思い出すようにというペトルの説諭に対しては、きっぱりと彼らへの未練を打ちきる旨の覚悟を披瀝する。さらに、過度の節制がもたらす健康への害を指摘するペトルに対しては、逆に、治療の際に食を控えるよう指図することがあるではないかと、反論する。一言でいえば、修道生活に対してありうべき批判のいちいちに対してスヴィアトーシャは毅然とした態度で答えるのである。やがて、スヴィアトーシャの言は「お前を言い含めたものに対してこれ以上いうことはない。」という言葉により一方的に締めくくられることになるが、全体としてそれは、相手の立場を傷つけることにより、自らの立場を正当化するということがない。このCl.20においては、世俗・修道を代表する二人の対話が決してその本質において妥協をみない点で、このエピソードの場合と同様であるにも関わらず、その二人の考え方の対立によって、修道僧としてのスヴィアトーシャの孤高の姿勢が、延ては、修道の意義そのものがよりくっきりと浮き立つことになった。即ち、二つのDirect Speechの間に意見の一致はなくとも、確かに“対話”が成立しているのである。スヴィアトーシャを説得する再度の機会こそ与えられないものの、ペトルの側の立場、即ち、世俗の側の考え方は、十分に保護されているように感じられる。

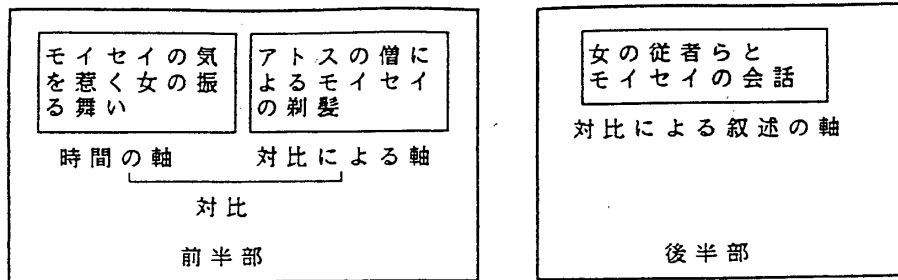
これに対して、このエピソードはいずれの側も聖書の文言を引いて自らの立場を明らかにしているのだが、両者の言い分は明らかに噛み合っておらず、論点があきらかに分らない。これは、主に、モイセイのアスケティックな姿勢に世俗の人々が呈する疑問を、彼が正面から受けとめることを避けているからである。世俗の人間達の悪意を初めから疑ってかかっているかのように、モイセイは彼らの言分を、大した根拠も示さずに、エデンの園の蛇のたぶらかしと決め付ける。それから、旧約聖書の記事に従って極めて中世ロシア的に、女性のもたらす害について雄弁に論じることになる。極言してしまえば、そこにあるものは、すでに用意された思想、即ち、イデオロギーへの盲目的な没入による感情のほとんど異常と、いってよい高ぶりであり、

テクニストを、享受の面では読者は登場人物をまねぶことが求められる、つまり、生活を限定すべきお手本がテクニストの生成のどこかで求められている、そのような広い意味での規範性が、中世文学の根底にあった。以上のことを念頭に置きながら、今一度モイセイの主張を振り返ってみると、「あらゆる義人達が女と共にいて救われたとしても、私だけは罪深く、女どもと共にいて救われることがない。」という言葉は、旧約聖書中の義人達への“まねび”を積極的に拒絶し、それがいかに未熟なものであるろうと、自らの見いだした真理にあくまで忠実たろうとする意志において、我々の目には驚くべきものと映る。こうした妥協を排した攻撃的とも言える姿勢は、トポス表現に代表される集団的意識とは別種の、掛け替えのない個に精神的な支柱を求めものとして異例のものということができるであろう。即ち、モイセイが一心を捧げた思想の貧しさにも関わらず、ここにあるのはまさしく、見いだされた個であり、何かのお手本によって限定を受けた受動的な精神ではないのである。つまり、思想自体の貧しさもやがて訪れる豊かな精神的な実りを暗示するもののように思われる。

こうしたエピソード3の在り方は、修道院の伝統と作者ポリカルプとの距離を示唆するものと言えらるであろう。ポリカルプは必ずしも修道院の伝統の中深くには根を下ろしていない。かれは、ほとんど得心のいかない事柄を心から信じているかのように振る舞うことを余儀なくされているように見える。かれは、聖書から盛んに引用を行なっているが、修道院の伝統に自分も参与していることを認められているが、かれが本当に信じているのは、個人、即ち、おのれ一個の他にないのである。物語全体に漲っている、なにかあまりに意識的な感じ、何かあまりに過剰な感じは、恐らく、修道院の伝統の要求するところと自らの心の自然に赴くところとの間に挟まれたポリカルプの葛藤に由来しているのである。

以上のように、モイセイと世俗の人々の会話からなる Direct Speechのみから成立したエピソード3に対して、エピソード4はモイセイの剃髪を扱い、構造の上でも、文体の上でも、かなり複雑な展開を行なう。

エピソード4の構造



モイセイの気を惹こうとするリヤヒの女は、モイセイの翻意を促して自分の持ち村を彼に見せて歩く。媚を含んでモイセイを説きにかかる女に対して、モイセイはあくまで初めの覚悟を変えず、彼女を奴婢らの前で辱めたばかりではなく、おそらくは神の遣わされたアトスの僧によって剃髪を受ける。これを怒った女は、モイセイを打ち据えるように配下のものに命じる。打擲しながら、モイセイの妥協を誘うその者たちに対して、モイセイは断固として初志を貫くことを誓う。

エピソード4の粗筋は以上のとおりであるが、一見してかなり複雑にプロットが輻輳していることに気づく。まず、前半部は前半箇所・後半箇所二つに分かれる *Novella* 構造を持っており、これが、後半部とやはり *Novella* 的な関係によって結合している。そして、これら、女がモイセイを連れて持ち村を歩く件、アトス山の僧侶によってモイセイが剃髪を受ける件、女に命ぜられて打擲を行なう人々の説諭にモイセイが答える件、以上の構造上の区分けは対比→時間→対比と流れる叙述の軸の変容を直接に反映している。以上のエピソード4の構造及び文体上の特長を図示すると以下のようになる。

Си слышавши жена, пом- ысль лукавъ въ сердци си приемши, въсажаетъ его на кони, и съ многы ми слугами, и повель водити его по градом и по селом, яже довьють ей, глаголюши ему: «Сиа вся твоа суть, яже угод- но суть тобъ: твори яже хошеши о всем» .	女はこれを胸に秘めて、 いたくこの奴婢を馬に 大勢のこの領有する巡 自らの巡りをして申 々々を巡りをして申 したあなたが望んで なんあなたのお望 なああなたのお望 なさってくださ	時間を軸 希薄ながら時間の流 れは存在する 対比 並列 (女は最後にこうい ったのであろう。) 以下、叙述の軸は、 時間から対比へ
--	---	---

法であった。ただ、第1タイプ Novellaの場合、帰結として導かれるのは、神の意志の介在の予感であり、後半部においては、それを証明する出来事がある登場人物の Direct Speechの中で枠物語として提出された。枠物語として提出される出来事は明らかに過去の事柄であり、前半部と後半部との間には扱われる時間の逆転があった。これに対して、このエピソードの場合は、前半箇所において帰結として逢着するのは、僧になろうというモイセイの決意であり、後半箇所においては、この決意に基づいて彼が実際に僧侶に成るまでが扱われている。時間の流れが操作されるということはなく、両者の関係は基本的に予言とその実現という形であり、この結合の仕方はむしろ、第3タイプの Novellaの場合そうであったように、聖者の予言とその死後における実現という形と一致する。

以上のように、リヤヒの女・奴婢・モイセイ各々にめまぐるしく叙述の視点を変えながら、女・モイセイの異なる立場を鮮明に描き分ける動の展開を行なう前半箇所に対して、後半箇所は事実を簡潔に報告することを目指した静の展開を行なう。

エピソード4 前半部後半箇所

<p>В ты же льни прииде нъкто мних от Святыя Горы, сыном иерья, богу наставляющу его, и при- де къ блаженному и обл- ече и въ фггельский об- разъ, и много поучивъ его о чистотъ, еже не предати плещий своих врагу и тоа сквернавыа жены избавитися, и сиа рекъ, отъиде от него. Възыскан же бысть тако- вый, и не отрътень.</p>	<p>ちよらどその頃、司祭を 勤めるある僧が、神のお 導きによるより、聖山から られたことによ、人訪は、 れ。もこのを、訪は、至 人をもとを、訪は、至 を僧の形に、僧の形に、 悪魔の手潔に、手潔に、 う、純潔に、純潔に、 こい女説の手に、か しが出、来る、か つて多、く、の、こ その場、を、立、ち、 のよ、う、な、ひ、 たが、見、つ、け、 た。</p>	<p>прииде 概括 詳細 прииде облече поучивъ отъиде възыскан же бысть не отрътень</p>	<p>← богу наставляющу 因果関係 時間的前後関係やや不 明瞭(ほぼ同時) сия рекъ 叙述の重複 天上よりの使者を表 トボス表現</p>
---	---	---	--

以上のように、後半箇所は明瞭な時間の軸により展開されており、モイセイの剃髪が導かれて終了する。先に述べたように、ここでは、事実の簡潔な報告が目指されており、前半箇所の動の展開に比して、静の展開をすると

いうことができる。ここにも、対比の原理が働いているのである。

"възыскан же бысть~, не отрѣтень"は、天上からの使者を表すトポス表現であるが、天上からの使者の手で世俗的な事情により叶えられなかった剃髪が叶うという筋は、キエフ・ペチェルスキー修道院列伝中にも他にあり(Сл.35ピーメン)、一種の定型的な物語のパターンであったことが考えられる。

後半部

<p>Тогда же жена, отчаавши ся своей надежа, раны тяжкы възлагаеть на Мо- исеа: растягши, повъле б- ити его жезлием, яко и земли наполнитися кров- и. И биущи глаголаху ему: (Покорися госпожи сво- ей и сътвори волю ея. Аще ли преслушаешися, то на уды раздробим ть- ло твое: не мни бо, яко избѣжиши сих мукъ, но по многихъ мукахъ горць предаси душу свою. Но помилуй сам себе и отл- ожи измождальныя сия ризы и облещися въ мно- гоценныя ризы, и избуди- ожидающихъ тебе мукъ, донельже не коснемся плоти твоей).</p>	<p>女はた自らの望みがい絶たれ たをを負わせた。イこの重 傷を横たえ、え杖のひと かじり、地面にあつた。に たは打ち、ど、た。も。血 れは、ど、ど。も。口 擲す。の心。う。が。分 言主。人。う。が。い。上 御の。心。う。が。い。上 の。お。が。い。上 る。こ。が。い。上 し。を。だ。た。こ。わ。ら。ま だ。を。だ。た。こ。わ。ら。ま れ。は。の。な。あ。る。が。よ み。の。な。あ。る。が。よ や。れ。の。な。あ。る。が。よ 口。の。な。あ。る。が。よ 華。の。な。あ。る。が。よ い。の。な。あ。る。が。よ の。前。の。な。あ。る。が。よ い。よ。モ。弟。命。よ。愚。し。舞。行。と。め。苦。う。で。か。形</p>	<p>отчаавши възлагаеть глаголаху 苦患と栄華 の対比</p>	<p>【概括+詳細】 растягши, ~は受苦の 具体的有様 以降、叙述の軸は、 時間から対比へ D.S.は物語の進行の 他、に異なる内面の 対比、を担う。モ、更 対し、比み、の、脅 しへ、榮華に強 の</p>
<p>И отвѣша Моисей: «Брат ие, повеленное вамъ тво- рители — творите. ника- ко же медляще. Мнѣ же ника- ко же мощно есть еже отрѣшися мнишества и любве божия. Никако же томление, ни огонь, ни ме- чь, ни раны не могут ме- не разлучити от бога и сего великаго аггельск- аго образа. И сия бесту- днаа и помраченно жена показа свое бестудие,</p>	<p>モ弟命よ愚し舞行とめ苦うでか形 イたじい。然、い出でとあら ちら。し。然、い出でとあら よ。た。が。為。て。る。神。を。来。あ。ら。か れ。は。の。な。あ。る。が。よ み。の。な。あ。る。が。よ や。れ。の。な。あ。る。が。よ 口。の。な。あ。る。が。よ 華。の。な。あ。る。が。よ い。の。な。あ。る。が。よ の。前。の。な。あ。る。が。よ い。よ。モ。弟。命。よ。愚。し。舞。行。と。め。苦。う。で。か。形</p>	<p>отвѣша</p>	<p>兄にが図るこ責あ、をの ちる愚僧振とるな貴あ、をの たす。をいぬ。るもすん炎うと え。た。を。い。ぬ。る。も。す。ん。炎。う。と お。こ。が。よ。ら。な。か。の。愛。し。は。ど。と。あ。ら。わ。ら。ぬ。す が。よ。ら。な。か。の。愛。し。は。ど。と。あ。ら。わ。ら。ぬ。す は。た。が。為。て。る。神。を。来。あ。ら。か れ。は。の。な。あ。る。が。よ み。の。な。あ。る。が。よ や。れ。の。な。あ。る。が。よ 口。の。な。あ。る。が。よ 華。の。な。あ。る。が。よ い。の。な。あ。る。が。よ の。前。の。な。あ。る。が。よ い。よ。モ。弟。命。よ。愚。し。舞。行。と。め。苦。う。で。か。形</p>

не токмо убоявшись бог-出来なない。この恥知ら
 a, но осквернение и пре-で愚かなり。女は、く、神を恐
 любодъвание. Ни ей покор-ぬばかひ。女は、く、神を恐
 юся, ни тоа окаанна во-い感でわいこ呪は
 лю сътвори) .

"растягши ~ наполнитися крови."においては、
 モイセイの受苦の惨状が、状態を状態そのものとして提出
 する写生の手法により、提示されている。このように責め
 さいなまれたモイセイの姿を背景として、前半部を展開し
 た時間の上で開始された後半部であるが、この後、物語は
 Direct Speechを中心に展開し、叙述の軸を時間から対比
 へと移して、女の奴婢らの提示する世俗的な栄華・更なる
 責め苦への脅迫と、受苦に対するモイセイの強烈な覚悟が、
 対比の構図の上に提出されている。この対比によって、紛
 れもなく浮かび上がってくるのは、言うまでもなく、受苦
 に対するモイセイの決意の強さである。

以上のようなエピソード4に対して、エピソード
 5は、困うじ果てた女が時のリヤヒの権力者ボレスラフに
 助けを求めにゆく件が扱われる。それは、エピソード4と
 共に、モイセイの決意が高まりゆき、女の望みが薄れてゆ
 くという流れの中に配置されるが、エピソード4に比して、
 より徹底的に対比の原理が働いている。即ち、先に述べた
 登場人物の内的な状態の変化は、文体の面でも、時間から
 対比への叙述の軸の移行という裏付けを持っているのであ
 る。これは、主題的な類似という以上に、エピソード間の
 強い結合を持つ第2タイプの Biographic Taleの特長を示
 すものと言える。

エピソード5

Многу же печаль имущ-大いなる悲しみは打ち
 и жена, каковы себе мь-ひしが恥辱の復讐は、何
 тити от срама, посылают-このポッとして、送ら
 къ князю Болеславу, си-を、送らして、おの
 е глаголющи: (Сам въси-を、送らして、おの
 яко мужь мой убиень-を、送らして、おの
 ысть на брани с тобою-を、送らして、おの
 ты же ми даль еси волю-を、送らして、おの
 да его же въсхошу, поим-の望み

叙述の軸は対比
 D.S.は物語の進行の他に、異なる
 内面の対比を担う(女=世俗的な
 栄華ボレスラフ=封建的な秩序
 感モイセイ=信仰への強固な
 意志)

26

Яко же и бысть по проп
ечению преподаюнаго.

至福のひとの予言通りのの
ことが実際に起こったの
回顧的など視点の導入…享受者であ
る僧侶に物語の扱ける出来とをよ
密接に結び付けることと意図
である。

Direct Speechは、物語の進行というよりも、異なる内面の表出という役割を果たしている。なぜなら、このエピソードの初めと終りで登場人物を取り巻く状況、殊に、女とモイセイのそれは、ほとんど変わっていないからである。ここでは、時間の経過による状況の変化はほとんど問題にされず、専ら、各々の登場人物の内面の表出のみに関心が集中している。それらが対比されることにより、最終的には、モイセイの受苦への堅固な意志が導かれるのである。

さて、ここでは、宗教的な立場を代表するモイセイの系列と、世俗的な権益を代表するリヤヒの女・ボレスラフの系列に分かれて、様々な事物が対比の軸を形成しているが、まず、その対比の軸を構成する各々の要素をここで点検していきたい。

まず、女がボレスラフにこれまでのいきさつを話す第一のDirect Speechでは、女がモイセイに与えた様々な恩典が語られ、その後、モイセイがこれらを拒絶して蒙った迫害の数々が挙げつらわれる。そして、こうした、文字どおり飴と鞭による誘惑にも関わらず、変わることはないモイセイの決心が(女の意図に反してであろうが)享受者の前に提示されることになる。以上のような女の打ち明け話を聞いたボレスラフはモイセイを呼び付けて、かれを説諭し、さらに、脅迫する。説諭は、女の愛を受け入れることによってもたらされる世俗の栄華であり、脅迫は、それを拒むことによって受けなければならぬ責め苦の数々である。このように、ボレスラフが女に肩入れして、モイセイの説得に勤めるのは、女とかつて交わした約束を守るという動機以上に、「お前(リヤヒの女)によって受けだされた囚われびとは誰一人として自由ではない。」という主従関係を配慮した封建的な秩序感覚のためであった。そして、翻って考えてみれば、女と交わした約束というものも、戦いによって敗れた貴頭を保護する意図を持ったものであり、それはとりもなおさず、封建的な秩序の護持を目論だものに他ならない。ボレスラフが代表するものは、世俗的な栄

華のうちでも、富ではなくむしろ、その権益的な側面であり、封建的な秩序感覚であった。ボレスラフは封建的な原理の人格化なのである。

このように Direct Speech 内部において林立する小さな対比・対立は、さらに規模の大きい対比＝モイセイ×リャヒの女・ボレスラフに吸収されて、全体としてみれば、入れ子的に重なり合う重層的な対比の構造を構成することになる。

以上のような、ボレスラフの説諭と脅迫に対して、モイセイは聖書の文言を引いて断固たる決意を表白する。Direct Speech 内部の Direct Speech は物語のもっとも重要な教訓を担うことが多いが、この場合も、かなり一般的なものであるとはいえ、その一つの例として有効なものである。

モイセイの拒絶は取り付く島もないほどに強固なものであったが、そのうえ、この聖者はリャヒの女とボレスラフの身の上に迫る暗雲を予告する。それは、彼らの誇る世俗の栄華への、モイセイの逆襲でもあった。以降、物語はモイセイのその後の運命と、このモイセイの予言をめぐって展開する。

エピソード 6

エピソード 5 は、回顧的な視点が導入され、その後の展開が暗示されて終了したが、物語も終りに近づいたこの時点では、Сл.28 グリゴーリイの場合もそうだったように、回顧的な視点が、ことにエピソードの導入と結末部において、その概要を提示したり、総括するために積極的に用いられている。このエピソード 6 も、エピソード 5 を締めた回顧的視点が生き続けて、導入を行なっている。

ここで、エピソード 5・6 のつながりあいを含めて今一度検討してみたい。エピソード 5 は、以上に見た通り、モイセイがリャヒの女やボレスラフに下す予言が導かれて終わっていた。そして、この予言の内容と直接呼応するのは、エピソード 6 前半部を飛び越えて、同後半部である。モイセイの予言の実現という観点から見れば、エピソード 6 前半部は、モイセイの受苦の極限という物語の核に当たると思われる部分を扱っているにも関わらず、登場人物達のそ

の後を扱った後半部への導入を果たしているに過ぎない。以下のコメントリーを見れば分かる通り、エピソード6は事実の簡潔な報告を目指したかなり単純な時間の軸により展開されており、Sl.28において、グリゴリーイの死がそうであったように、プロットのクライマックスへの集約を伴わずに、叙述は極めて淡々と行なわれている。しかも、図らずもこの部分が次の箇所への導入と見做しうることは示唆的である。物語全体を通し、作者が意を用いているのは、登場人物達の動きよりもむしろ、イデオロギーの展開・プロパガンダなのである。

エピソード6前半部

Жена же, взявши на нем власть большую, бес- тудно влечаше его на грѣх.	大破に引く 女は廉恥を引く はなはだ引く こるに引く の権も引く ひ勢も引く とを引く に引く 対引く して引く	概括的把握(巨視的把握) 詳細の情報(微視的把握)	повель лобызаючи отъимаючи не може привлещи	同時	рече
Единою же повель его нужю положить на одръ своём съ собою, лобызаю- щи и обьимаючи, но не може ни сею прельстию на свое желание привле- щи его.	ある無入、よもるき にきし のせ こ の ひ と に 対 して				
Рече же к ней жлаженны- я: «Въсуде труд твой, не мни бо мя яко бузумна или не могуша сего дѣл- а сътворити, но страха ради бо жиа тебе гнушаю- ся, яко нечисты» .	「お前だ。のまこつて こ の ひ と に 対 して				
И си слышавши, жена пов- ъле ему тайныя уды урь- зати, глаголющи: « Не пошаю сего доброты, да не насытятся инии его красоты» .	「を切たり。し誰しも こ の ひ と に 対 して		слышавши повъле	時間軸からの逸脱要素 глаголющи: (【概括+詳細】 女の心境	
Моисей же дежаше аки м- ертвъ от течения крови и мало дыханиа в себѣ имья.	「死た こ の ひ と に 対 して		лежаше	и мало ~ 付带的状況	

エピソードは、Direct Speechを中心に進められるが、最終的には、モイセイの受苦の極限、言語を絶した迫害を導くことから、ここでの動きは、主機能としては物

語の展開であり、副次的には異なる内面の対比を担うといえる。ここでの Direct Speech の機能は Сл.5 の場合と酷似している。ことに、女の《 Не пощажю ~ красоты. 》は、モイセイに拒絶され続けた女の内面を集約的に吐露するものとして、交渉のそれぞれの局面でのザハリア、イオアンの立場を端的に表明した Сл.5 の Direct Speech とほぼ同じ役目を果たしている。

回顧的な視点の導入によって時間の前後関係が曖昧になる嫌いがあるものの、エピソード 5・6 は時間的前後関係によって配列されているといってもよいであろう。モイセイへの迫害に下された天罰と女への拒絶を貫き通したモイセイへの返報を扱った後半部も、こうした時間的前後関係が配慮されたものといってもよい。

エピソード 6 後半部

<p>Болеслав же, усрамився Болеславはここの女の величества жены и любви 権勢の大きさをこの女 е пръвья, потакви ей тв- 愛の為にこの女が言 оря, въздвиже гонение в- りになつて、僧侶たちへ елие на черноризци и の大規模な迫害を開始 изгна вся от области 自ら領土から僧たち своєю. べてを放逐した。ため Богъ же сътвори отъмыш- 神は自らの僕のために報 ение рабом своим въско- 復を始めた。</p>	<p>усрамився ~ творя ↓ 因果関係 и изгна ~ 叙述の重複 概括 (巨視的把握)</p>
<p>рѣ. Въ едину убо ношь Боле- 同日夜ボレスлавは原因 славъ напрасно умре, и 不明の死を遂げ、リヤヒ бысть мятежь великъ въ の地には大規模な反乱が всей Ляской земли, и въ- 起こり、ひとびとは自分 ставше людие избиша еп- たちを打ち殺した。このこ ископы своя и боляре ちを打ち殺した。このこ своя, яко же в Лѣтописц- とは年代記の記すとおり и повѣдаеть. である。 Тогда и сию жену убиша. そのときこの女も殺され</p>	<p>въздвиге сътвори умре бысть убиша възмогъ прииде</p> <p>【詳細 (微視的把握)】 Въсташа ~ (# 27) 【概括 + 詳細】 反乱のより詳細な情報 報 — 歴史への言及 叙述の軸は対比 ボレスлав — 女 — モイセイ 状況の総合的な把握 を目指す 叙述の軸は時間</p>
<p>Преподобный же Моисей 至福のモイセイは傷 възмогъ от рань, прииде こも癒えて、受難の傷跡を къ святыи боготодици в 負い、勇敢なるキリスト Печерский святыи мана- の勝利者という信仰の桂 стырѣ, нося на собѣ муч- 冠を戴いて、聖ベチエル еничская раны и вънец- スキー修道院の聖母も ь исповедания, яко побь- とにやってきた。 дитель храборѣ Христов ѣ. Господь же дарова ему 主はこのひとに情欲に打 силу на страсти. ち克つ力をお与えにな ь.</p>	<p>възмогъ прииде дарова</p> <p>нося на собѣ ~ 付帯状況 (信仰を貫いた モイセイへの賛辞)</p>

ボレスラフ・リヤヒの女、モイセイは、各々異なる時間の系を持ち、それぞれの系が神に背いたもの、神に従順だったものを代表して、互いに対比されている。これは、Сл.28盗賊の縊死の場面において採用されたものと同じ、状況の総合的な把握を目指した対比による叙述の軸である。

モイセイの堅忍を嘉して神の授けた сила на страстиをめぐり、ほとんど逸脱的に、次のエピソードが展開される。物語の以上の部分と、次のエピソードとの関係は、聖者の迫害を扱った第4タイプの Novellaにおいてあったような、聖者の受苦からなる物語の核部分と、聖者の死後の奇跡、あるいは、救出ののちにおけるその偉業を扱う付加的な部分との関係に限りなく近い。

エピソード7

Нькыя бо братъ, борим бывъ на блуд, и пришед, моляше сего преподобна- го помощи ему: «И аше ми, рече, что речеши, има- м съхранити и до смерт и такова обьта» .	情欲に打ち負かされたあ る兄弟が、このひとつの とにやってきて、この至 福の人に助けてくれるよ う頼んだ。「これから死 ぬまで、あなたのおっしま ることを守ると誓いま す。」	борим бывъ пришед моляше	
Блаженный же рече тому : « Да николи же речеши слова никацьй жень в животь своем» .	至福のひとつはこのものに 言った。「自分が生きて一 い間、どんな女にも一 言も言葉を懸けてはいけ ない。」	рече	
Он же обьшася с любви- ю. Святыя же, имьа жезль в руць своей, бь бо не мо- гый ходити от оных ран- ь, и симь удари его в л- оно, и абие омертвьша уды его, и оттоль не бы- сть пакости брату.	このものは愛をもって誓 いを立てた。 聖なるひとつは手に錫杖を もっていた。と歩くこと が出来ないからだが、こ の錫杖でこちらの額を打 つと、たちまち肢体が死 んだようになり、以後、 誘惑が起こらなくなった。	обьшася ударил омертвьша не бысть	имьа ~ своей 【概括 + 詳細】 付帯状況 ↑ 因果関係 бь бо ~ рань

エピソード7は、時間の軸によって展開している。Direct Speechを交えての、若干の描出性をも伴った簡潔な展開は、Сл.5のそれとほぼ同じものである。

最後に、説教調の文体によって主人公モイセイの一生が鳥瞰的に概括されて物語部分が終了する。

附加的な部分

<p>Се же вписано есть в житии святаго отца нашего Антониа, еже о Моисееи, бѣ бо пришелъ блаженый въ дѣни святаго Антониа и скончася о господь въ добрь исповѣдании, пребывъ в манастыри лѣтъ 10, а въ пленении страдавъ въ узах 5 лѣтъ, 6-е лѣто за чистоту.</p>	<p>これらのがないア、と、は、中、仰、ま、道、て、年、</p>	<p>このモイセイのことは、二、の、こ、は、</p>	<p>總括 説教調の文体 (нравописательский стиль) 物語に書かれた事柄と享受者である僧侶をより密接に結び付けることを意図</p>
--	----------------------------------	----------------------------	---

以上で、物語部分終了

以降は物語の扱った出来事をルーシ全体の歴史の中で捉え直すことを意図したものであるが、それらの記述は徒に博覧強記に傾斜して、主人公モイセイをその中の然るべき場所に位置づけようという意図、享受者である僧侶達への自覚を促す意図はほとんど看取されることがない。しかしながら、歴史のなかで個人を捉えるという姿勢は、ポリカルプに特有の態度であり、物語に柄の大きさという特色を与えている。

説教

<p>Помянух же и чернечское изгнание в Лясъх преподобнаго ради пострижения, еже вдатися богу, его же възлюби.</p> <p>Сиа же вписано есть в житии святаго отца нашего Феодосиа.</p> <p>Егда изгнанъ бысть святый отецъ нашъ Антоние княземъ Изяславомъ Варлаама ради и Ефрема, княгины же его, ляховица сущи, възбрани ему, глаголещи: (ни мысли, ни сътвори сего. Сице жо сътвори ся нѣкогда в земли нашей: нѣкоя ради вины изгнани быша черноризци и от прельель земли нашея, и велико зло съдѣася в Лясъх).</p> <p>Сего ради Моисеа се сътворися, яко же преди написахом.</p>	<p>このひとをよなく愛し、この神に我が身を委ね奉るに、至福のひとの地をのぼり、リヤヒ追はるるに、たしは賞えたるに、わたしたは聖なるに、この父フエオドールは、聖者である。それがわが父の書かすに、イムより追はるるに、一レイムより追はるるに、スラフは、妻をなさん。と、同じ土地の、何々の土地に、我々の土地に、リヤヒ起る。このこと、</p>	<p>歴史との関連づけ 祈構風の文体</p>
--	---	----------------------------

28

結 び

以上、ポリカルプによる二つの物語の検討を行なってきた。これらの物語を今回の検討の対象にしたのは若干の事情がある。ポリカルプによる物語の執筆順について研究者達は様々な議論を行なってきたが、筆者は、カッシアン編纂本の配列順がポリカルプの執筆順と一致するというブブナーの説をほぼ全面的に支持している。ポリカルプによる物語においては、傑作と目すべき作品が配列順の後半に集中していることも、破戒僧ポリカルプが執筆と共に何らかの精神的成長をとげた証左と考えてよいかもしれない。本稿は、文体的な特長から、このブブナー説を支持しようとする試みでもある。Сл.29アガピットをСл.20スヴィアトーシャとの関連で修士論文において扱ったことから、今回はСл.28・Сл.30を取り上げて評釈行なった。

結論として得られたことは、各々の物語の末尾に整理してあるが、特に強調すべきと思われる点について、ここで、重複を恐れずに取り上げてみたい。

まず、第一は、叙述の軸を同定する場合、従来設定したタイプでは扱いきれないケースが出て来たことである。それは、状況の総合的な把握を目指して複数の時間の軸を並列する場合であり、Сл.28のエピソード3、Сл.30のエピソード6がそうであった。さらに、世俗をする代表する考え方・僧侶を代表する考え方、相異なる二つのものの考え方を並列し、最終的には後者の優位性をプロットによって決定するというタイプの叙述の展開が挙げられる。Сл.30のほとんどのエピソードがこのタイプの叙述によって展開されている。両者とも、各々の要素(前者の場合は時間の軸・後者の場合は思想)の独立性(互いに他と共有するものをもたない)を前提にして、それらの要素がもつ異なる価値が対比されることから、これを対比による叙述の軸と名付けた。

第二に、ポリカルプによる物語における語り手の複雑化・多角化・多機能化が挙げられる。本稿は、シモンによる物語がもつ、文体の驚くべき簡潔さを指摘することから出発した。シモンによる物語においては、語り手は僧侶としての価値観に強く拘束され、地の文のなかで、事実の簡潔な報告を目指す単純な時間の軸を推進するに過ぎなかった。ここでは、事実の積み重ねによって形成される

時間の容赦ない流れと、そこに顕現する神の意志に作者の関心が集中しているように見える。これに対して、ポリカルプによる物語では、例えば、Сл.28に看られるように、[概括的把握+詳細の情報]という叙述パターンの多用により、場面の情景描出に深くこだわった物語の展開を行なっているし、他にも、Сл.30エピソード2に看られるように、語り手が、僧侶としての価値観を離れて、任意の登場人物の視点から、ある出来事を性格づけるという、価値観をめぐる視点の自由な変換が行なわれている。こうした語り手の性質の変容は、物語が広い意味での美的享受に傾いていることを裏付けるものである。

以上が本稿の中心的な結論であるが、他にも派生的に、聖者列伝と歴史的なレアリアに関する問題・キエフ・ペチェルスキー聖者列伝と他の翻訳聖者伝、聖書との影響関係をめぐる問題、以上二つの問題に関する指針、さらに、作者ポリカルプ像の構成(ポリカルプを修道院への一種の反逆者と想定するソビエトの研究者 Копрееваの興味深い先行研究(#29)があり、本稿も大筋で彼女の見解に従っている)などを試みている。

この評釈は、構造と文体への客観的な分析と、テキストとの対話を志した鑑賞との、二つの核をもっている。両者が互いに支え合うことを願い、テキストを大切にしてください。これをできるだけ密に読み込むことを心掛けたが、このこめとが筆者の力量をはるかに上回る仕事であったことは否めない。広範囲に及ぶ問題を十分に掘り下げることができず、論としての集中を欠いた恨みもある。今後、ポリカルプによる他の物語へと研究対象を広げたいと考えているが、中世文学に対する筆者の研究の中間報告として、羞愧の念を抑えながら、本稿を提出したいと思う。

註

- # 1 Пушкин, А.С., письмо к
Плетневу, 14, 4, 1831, собрание сочинений т.10
- # 2 Лихачев, Д.С., "Die literatur", Geshichite der
Kultur der alten Rus', 1962, Berlin, p.203
- # 3 Tschidzewsky, History of Russian Literature,
- # 4 Fedotov, G.P., The Russian Religious Mind

- # 5 アウエルバッハ,『ミメーシス』,p10,15
- # 6 ロースキー,V.,『キリスト教東方の神秘主義思想』
- # 7 ルカ伝 1 2 章 3 3 - 3 4 節
- # 8 Адрианова-Перетц,Задачи изучения
《агиографического стиля》 Древней
Руси,ТОДРЛ,Т.20,С.41~ 71
- # 9 Дуйчев,И.В.,Эпизод из Киево-Печерского
патерики,ТОДРЛт.24,с.89~ 92
- # 1 0 Prestel,K.P.,The Comparative Study of Kevan
Caves Monastery,p.126
- # 1 1 原初年代記 1 0 9 3 年 ロスチスラフの死は、こ
こで、「彼の母は彼を思って泣き、すべての人々は彼が若か
ったことを思って泣いた。」と記されている。この箇所は、
多くの研究者によって注目され、聖者列伝と年代記の性質
の違いを示唆する事実として取り上げられる。
- # 1 2 マタイ伝 7 章 - 2 節
- # 1 3 ルカ伝 1 8 章 3 節
- # 1 4 ローマ人への手紙 7 章 9 節
- # 1 5 Fedotov,G.P.,The Russian Religious
Mind,p.143
- # 1 6 原初年代記 1 0 1 5 年の項・ボリス殺害の件
ゲオルギアはボリスに愛されたウグリ人下級従士である。
ボリスが殺害される時にこれをかばおうとして死んだ。
ボリスを殺害した者たちは、彼を愛したボリスが与えた首
輪を奪おうとして、彼の首を切り落とした。
- # 1 7 創世記 3 章
- # 1 8 士師記 1 6 章 サムソンは怪力の秘密をデリラに
漏らしたために、襲われて捕えられ、目を抉られ、枷を填
められて、様々な辱めを受ける。
- # 1 9 列王記上 1 6 章 ソロモンはファラオの娘はじめ、
様々な民族の女を囲い、その晩年にいたり、偶像崇拜を認
めるようになる。
- # 2 0 マタイ 1 9 章 4 節
- # 2 1 コリント人への手紙 7 章 9 節
- # 2 2 創世記 3 9 章 自分をそねむ兄達によってイシュ
マエル人達に売られたヨセフはファラオの侍従長ポティフ
アルの管財人になる。ここで、ポティファルの妻に再三言
い寄られるが、ヨセフはこれを拒み続け、対にはその策謀
にかかり、獄につながれる。
- # 2 3 マタイ 1 9 章 2 9 節

2 4 コリント人への手紙 3 2 - 3 3 章

2 5 エフェソ人への手紙 6 章 5 節

2 6 ポラニ族のピヤスト家ミシェコ 1 世の子、フローブリ勇敢王と呼ばれた。チェコ侯からマウウオポルスカ、モラビアを奪い、ロシアの内乱にも関与した。スヴィアトポルクとは義兄弟の関係にある。

2 7 原初年代記 1 0 3 0 年にこのポーランドの内乱の記録がある。この後、ピヤスト家は多くの版図を失った。

2 8 ワルラームとエフレームはともにイジャスラフ・ヤロスラーウィチに近い貴頭。彼らの剃髪はイジャスラフの不興を買い、そのために、アントーニイは一時的にも修道院から逃れざるを得なかった。(各国世界史 東欧史 p.40)

2 9 Копреева, Т.Н., Образ инока Порикарпа по письмам Симона и Порикарпа, ТОДРЛ Т.24, С.112~116

参 考 文 献

概ね 1 9 9 0 年度東京大学に提出した修士論文において使用したものと重なっている。次に上げるのは特に使用したもののみ。

刊本 Памятник Литературы Древней Руси
1 2 , Москва, 1 9 8 0

Das Paterikon des Kiever Hoehlenklosters
nach der Ausg. von D.Abramovisch neu hrsg.
von D Tschizewski, Munchen, 1 9 6 4

翻訳 The Paterik of the Kievan Caves Monastery
translated by Muriel
Heppel, Harvard UP , 1 9 8 9

その他 Адрианова-Перетц, Задачи изучения
《агиографического стиля》 Древней Руси, ТОДРЛ
т.20., с.41~71, 1 9 6 4 , Москва

Дуйчев, Эпизод из Киево-Печерского патерика, ТОДРЛ
Т.24, с.89~91 1 9 6 8 , Москва

Prestel, K.P. A comparative analysis of "Kievan Caves Paterikon", 1 9 8 5 , Michigan

Friedrich Bubner, Eine Untersuchung zu seiner

Struktur und den literarischen Quellen, 1 9 6 9 ,
Heidelberg
Fedotov, G.P., The Russian Religious Mind, 1 9 6 6 ,
Cambridge, Massachusetts
Tschizewski, History of Russian Literature, 1 9 7 1
Пушкин, собрание сочинений т.10, 1 9 7 7 , Москва
Копреева, Т.Н., Образ инока Порикарпа по Письмам
Симона и Поликарпа, ТОДРЛ Т.24, 1 9 6 9 , Москва

邦語文献 V.ロースキイ, キリスト教東方の神秘思想,
1 9 8 6 , 東京

世界各国史 東欧史, 矢田俊隆編, 1 9 7 7 , 東京